

<調査報告>

私の歩み：黒川セツ

小 川 正 人

- 目次
- I はじめに
 - II 黒川セツ「私の歩み」
 - 1. 子どものころの思い出
 - 2. 学校をやめ、あちこちで働く
 - 3. 戦争そして発疹チフスに襲われたころ
 - 4. 戦後の暮らし
 - III 註記

I はじめに

ここに報告するのは、平取町貫気別^{ぬきべつ}在住の黒川セツさん（1926年生まれ）が語った自身の生活体験記をまとめたものである。本稿は、自身の歴史を記録にとどめたいという黒川氏自身の希望によるものであると同時に、ひとりひとりの歩みの記録を積み上げ重ね合わせることによって近現代の歴史を考える手がかりを蓄積していきたいという報告者の考えにもとづく第1回めの報告でもある。

ここでは本文に先立ち前提的なことがらを説明しておく。

1. 黒川セツ氏については、既に幾つかの採録が活字化または映像化されている。例えば1996、97（平成8、9）年度の『アイヌ民俗文化財調査報告書』（北海道教育委員会）や貝澤太一「沙流川中流域におけるイナウに使用する樹木に関する報告」(1)(2)（『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』2、3号、1996、97年）等の報告書、『アイヌ文化を学ぶ』（アイヌ無形文化伝承保存会、1993年）等の記録映像は、黒川氏の伝統文化に関する様々な知見を伝える。また「発疹チフス コタンを襲う」（聞き手川上勇治、『エカシとフチ』札幌テレビ放送、1983年）は、戦後間もなく起こった貫気別での発疹チフスの流行を語ったものとして、それまでは『平取町史』がわずかに触れる程度であった中での重要な記録にもなっている。

この他にも黒川氏は、ご自身の言葉をお借りすれば「わしの知っていることは全部伝えておきたい」と、当センターをはじめいくつかの機関・個人の聞き取り調査に協力なさっている。他日これらの伝承が集成されることを期したい。

2. 平取町貫気別は、沙流川の支流である額平川^{ぬかびら}の流域に位置する。沙流川河口にある富川から約30km、平取町役場のある平取からは約15～6kmのところになる。もとはアイヌの集落のみがあり、シャモ（和人）は1890年代に入ってから定住を始めている。100年前から黒川氏の少女時代のころまでの貫気別の統計上の人口を略記すれば次のとおりである（カッコ内はそのうちアイヌの人口とされる数である）⁽¹⁾。人口は1920年代以降主にシャモの流入により急速に増加し、貫気別の市街地は当時の平取村内では有数の規模になっている。黒川氏が育ったコタンはこの市街地からやや離れた高台にある。（〔地図〕参照）

1898（明治31）年：83（56）	1907（明治40）年：287（69）	1919（大正8）年：368（136）
1929（昭和4）年：815（215）	1933（昭和8）年：953（140）	

3. アイヌ史におけるいわゆる生活史の積み重ねの必要性や意義については、管見の範囲でも既に1970年代から見ることができる⁽²⁾。特に近年における、日本語であれアイヌ語であれひとりひとりの歩みの記録の蓄積がアイヌ史の重要な要素になるという主張⁽³⁾には、報告者もまた意を同じくするところが多い。本稿はこれらの延長線上に位置しようとするものであり、それゆえに、いわゆる伝統文化調査や、現在もしばしば見られるルポルタージュ的な聞き書きなどと比べ、伝統文化、差別や社会運動といった特定の側面に焦点を合わせた記録とはしないことを意識した。もちろん、あらゆる調査において聞き手の関心が話題の選択に影響を与えることは避けられないし、本稿の場合、後述するような一定の編集作業を行なってもいる。しかし本稿は、黒川氏自身が、自己の歩みを幼い頃から比較的近年までにわたってなるべく余すことなく語り伝えようとした結果、例えばカムイノミや熊送りなどの体験も、学校、^{でめん}出面、百人一首、保険のセールスといった、暮らしの様々な要素や場面の一つとして語られていることが重要だと報告者は考えている。

(1) 貫気別の人口統計等については、『北海道殖民状況報文 日高国』（北海道庁殖民部拓植課、1899年）、『平取外八箇村史』（第2版、平取外八箇村戸長役場、1920年）のほか1929、1934年度の平取村の村勢一斑によった。この統計の大字貫気別は現在の旭（上貫気別）等を含む。1919年以降のアイヌ人口の増加は新冠から上貫気別に強制移住させられた人々を含むためである。

(2) 例えば『アスタリアイヌ』（アスタリアイヌ刊行会、1972～73年）や『北方群』（北方群同人、1973年～）はいずれも意識していわゆる古老からの聞き書きを掲載している。

(3) 萱野茂「エカジー人は図書館一館」『アイヌ史 北海道アイヌ協会・北海道ウタリ協会活動史編』北海道ウタリ協会、1994年、奥田統己「織田ステノさんのこと」計良智子『アイヌの四季』明石書店、1995年、同「織田ステノのイコベツカ」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第4号、1998年、川上勇治「アイヌの歴史一私の伝え聞いたウバックマ」『アイヌ文化』第23号、アイヌ無形文化伝承保存会、1999年、特に19～20ページ。

4. 本稿がもとにした採録は、次の6回にわたって行なった。採録年月日と主な内容を示すと次のとおりである。録音時間の合計は約7時間である。

2000年9月16日：子供の頃のこと（最初の記憶から学校をやめるころまで）

2000年10月4日：少女時代のさまざまな奉公や出面のこと、戦後の発疹チブス流行のこと

2000年10月21日：戦争中のこと、戦後夫が復員してから夫が亡くなるまでのこと

2000年10月28日：祖父らのこと、これまで語り残していたことの補遺

2001年1月20日、2月4日：これまでの聞き取りを踏まえた補足など

これらの採録は当初から本稿の作成を意識して行なったもので、最初の3回は先ず黒川氏が基本的に自身の歩みを順を追って語り、4回目からはそれらにもとづき報告者の方からもいくつか質問しそれに答えて語った内容を含むようになっている。

本稿の作成にあたっては、以上の記録を、基本的に時系列順に並べ替え編集した。紙幅の都合により、本稿の分量は黒川氏の語った全体から比べると3分の1程度になっている。このため戦争中の様々な苦労など黒川氏自身がぜひ記録しておきたいと述べておられたことを含め、いくつもの話題を削除せざるを得なかった。また前後の文脈から切り離されている部分があることも予めことわっておかねばならない。

話の最初は黒川氏の幼少の記憶からとし、夫が亡くなった1980年代後半、元号が昭和から平成に代わるころを区切りとした。その後現在に至るまでにも、黒川氏自身の言葉を借りれば「もう、苦労の追い討ち追い討ちさ」というほどの、本稿で取り上げた様々なことがらに匹敵するような、いろいろな出来事や苦労があったとのことだが、比較的近年のことに属する時期ということで、今回は報告に含めなかった。これら今回の報告に収めきれなかった記録については他日然るべき機会をまちたい。

以下本稿では黒川氏のことを「セツさん」と記させていただく。

本稿にかかる録音資料は北海道立アイヌ民族文化研究センターが保管する。

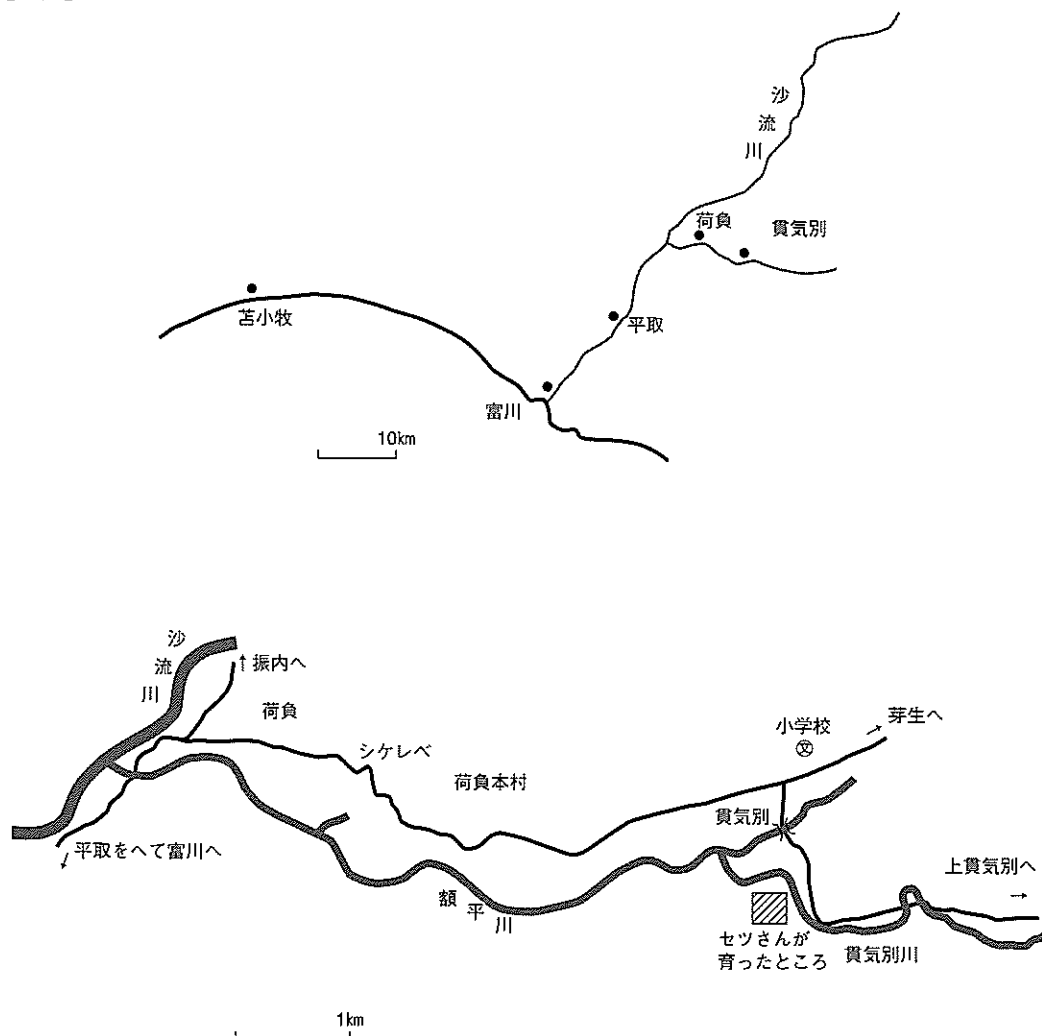
本稿の草稿を読み貴重な意見や教示を下された方々、そして長時間におよぶ聞き取りに応じて下さった黒川セツ氏に深く感謝する。

[凡例]

- ・6回の聞き取りを、主に時系列と話題にそって並べ替えた。
- ・セツさんの語りはそのまま文字に直して読みやすいものが多かったので、本文は基本的には録音そのまま文字化したものをもとにし、セツさんの語り口調を残すようにした。ただし、紙幅の都合により同じ話題の重複部分は削除した。また、話し言葉にありがちな間投詞等の削除を中心に文章を圧縮し整序した。
- ・全体を大きく4つに分け、話題ごとに小見出しを付けた。

- ・小川による補足等は〔 〕内に記した。言葉の説明などの簡単な註記は、適宜本文中にこのカッコ書きで説明した。語意については石垣福雄『北海道方言辞典』（北海道新聞社、1991年）、『日本国語大辞典』（小学館）などを参照した。
- ・小川によるやや長い註記は、本文中に番号を付けⅢに記載した。
- ・アイヌ語の単語はカタカナで表記し、表記法は北海道ウタリ協会企画・発行の『アコロイタカ アイヌ語テキスト1』（1994年）に従った。
- ・典拠とした録音はそれぞれの項ごとに（ ）内に6桁の数字で示した。例えば（001004）は2000年10月4日の採録を示す。

[地図]



出典：5万分の1地形図「佐瑠太」（1919年測図、1931年陸地測量部印刷・発行）など当時の5万分図をもとに作成

Ⅱ 私の歩み 黒川セツ

1. 子どものころの思い出

4歳のとき貫気別に引っ越す

わし荷負に生まれたからね。スケレベ〔シケレベ〕ってあるしょ、荷負の学校からこっち〔貫気別の方向へ〕来た、あそこに生まれたの。

大正15年1月5日に生まれて、4歳まで荷負で育て。父親が樺太に——昔、このへんの人たちはほとんど樺太に仕事に行ったからね、うちの父親も樺太に仕事に行くって行って、出かけたまんま帰ってこないもんだから、それでやっぱり、生活して行けないしょ。それで、うちの母ちゃんも、「したら〔実家のある〕貫気別行くか」っていうことで、そうしたと思うんだ。こっちの人らと話し合っただけね。わし子供だったからわからなかったけど。

そのときに、うちの母親は、「今日貫気別行くから」って。あんた、どこにスケレベからこっちへ引っ越してくるのに、ちょこっとした手荷物持って、まだ弟が、わしが4歳で弟1歳だから、〔弟を〕背中におぶって手荷物両方からぶらさげただけで、「引っ越ししていくのに、こんなことどうなるかなー」と思ってね、子供ながらもさ。

スケレベから、この川〔額平川〕なりに来て。そしたら本村〔荷負本村〕の下あたり来たらすごい土砂降り雨。もう大雨でどうしようもなく、そして傘持つとか、昔なんかそんなものもあるわけじゃないから。

ニオイ沢の入り口まできたときに、もう、なお土砂降りになったもんだから、木原さ入れれば、雨降ってもまともには当たらないしょ、木の葉の上に落ちたりフキの葉っぱ——わしは小さいから、フキがもうものすごい大きいもんだからね、そしてそのフキの葉の下さ入って雨やどりしていたら、今はあんまりないけど、昔はすごい、バツタがいたのね。したからその雨の音と、バツタが、雨降るもんだからもうパタパタパタパタ、そこらへんにいるバツタがみんな跳んで、フキの葉の上さパタンパタンパタンパタン。雨の音とバツタが跳んでもう、すごいしさ。バツタなんか付いたってかじるわけでもないし、蚊やなんかと違って痛がゆいわけでもないんだけど、あまりいることによってびっくりして、ほんとに、こんなにバツタっているとこあるものかと思うぐらい、びっくりして。

雨降ったからもう、ニオイ沢の水もだいぶ出てね。そうすんのに、うちの母ちゃんが、背中には赤ん坊おぶってるし、わしは4歳くらいだから、川、手つないだって越えれないから、こんど、片方の手で〔私を〕つかまえて、そして荷物片方の手で持ってそしてその沢渡って、まだずっと本村の下のこの川なりずっと来て来て、川なり来て。なんで道路歩かないのかなと思ったの。靴も履いてないで裸足でしょ。そしたらイチゴの蔓にからまされて足は痛い、石の上で歩くから足の裏が痛くて。

そして行ったっけ、大雨降りだから、孫じいさん⁽¹⁾もばあさんも家にいた。そして、もうびっくりしてね。「なんでこんな雨降りに来るんだ」って。来るんだったらちゃんと天気の良いときに来るもしないでって、孫ばあさんが怒るのさ。じいさんは黙っているけども、家出してきたっちゅうことわかるしょ。子供二人連れて、ちょっとした風呂敷包み一つ持ってる [だけだ] から。じいさんはだまーって座っているんだけど、ばあさんだけは、どうしてこんな雨降りに来るんだって、来るんなら天気の良い時に連れて来えばいいのに、子供たち、孫たちがこんなにずぶぬれなって、ってすごく怒るんだわ。

そしてわしの頭、タオルだか何か布で拭いて、着替えさして、火どンドン焚いて、あたらししてくれてね。そういうふうにして貫気別に来たのが4歳だわ。おそらく、6月ぐらいだったと…畑のものもあんまり伸びてなかったし、今考えてみればね、やっぱり6月か7月ころにバツタっている時期だから、したから6月か7月だと思ふんだわ。

もう次の日からうちの母さんは、農家の出^{でめん}面 [日雇いの仕事] に行ったんだから、やっぱり6月か7月だったんだ。そして出面に頼まれて、あちこち、ここ貫気別はたくさん農家あるから、農家の出面に行っては米もらって来たり、お金もらって来たりして、そしてわしらば養って。(000916)

母の再婚で上貫気別へ

そこさ行ってからまた2年 [で]、今の上貫気別っていうところ行ったんだから。そこにうちの母さんが再婚して。

そこに行ったのは、馬^{ばそり}櫓で行ったんだから、冬行ったんだわ。今考えてみるとね。馬櫓に乗せられて、夜行ったから、もうどこがどこさ行くんだか訳わからなく、行けども行けども家もないんだわ。木原ばかりで、一本道で。いや恐ろしいとこさ来るもんだ、どこさ行くもんだと思ってね、子ども心にも。

そしたらそこは、新冠の御料牧場から来た人らが住んでいるところで、今度は開拓やらなきゃない、これから土地を拓いてやる家さ行ったんだね⁽²⁾。そして、雪解けて、馬櫓で行ったけど、気づいてみればもう雪もなくなって、そしてやっぱり、伐木して、農家しなきゃならないんだわ。そして、今度、一、二年たったら、妹が生まれたのさ。(000916)

弟と青エンドウをとりに行く

7月ころだべね、青エンドウ食べる時期だから。母親は子供二人いて、それでお産したしょ、そしたら今度お昼に食べるもの、行って青エンドウとってこいって言われて。畑さ行って、こんなコンダン [コダン：小物入れの籠] 背負って。行く途中で、木登りして桑の実とって。わしが木登りして、こんど木の枝からこうぶら下がるしょ、そしたら木の枝がこうなる [垂れ下がる] から、弟が、手の届く限り、やっぱり赤くても黒くても何でも食べるんだ。腹減ってるから。だから、「お前、赤いの食べんなよ、黒いのだけ食べれよ」って言うんだけど。

そうしてやっとの思いで畑さたどり着いて、そしたら子供だもの、エンドウ豆ちぎるったって、

ずらーっとおっきな畑に植えてあるから、そのエンドウ豆をちぎってもちぎっても、その入れ物に一杯にならないのさ、コンダンに。それ一杯とってかなかったら、みんなで食べれないから、「それ一杯にするまでお前もとれ、いっしょけんめとれ」って言ったって、弟はまだちっちゃいもの、とり方もわからないしょ、一つ掴めば引^{つか}張るもんだから、エンド豆の木まま抜けてくるしょ、そしたら、「そなんするんでない！こうするんだ！」って、教えて叩いて、そやって二人でやーっとの思いでそのコンダン一杯にしたら、背負えないしょ、子供だから。

背負えないから今度引張ってくるの。だから砂もゴミも入ってたべき、あれ。そうやって引張って、道路なり引張ったら、あそこは山奥だから蛇がいるのさ。もう道路の真ん中にもこんな固まってる、そっち行けばまだいるまだいるだから、わしは蛇おっかなくないんだけど、弟は蛇おっかながるから、「おれは行かなーい、いやだー、いやだー」ってそこに泣いて立って動かないのさ。また戻ってきて弟の手引張って、やっと帰ってきて、その青エンドウ、母さんがお産して寝てるんだけど、起きてきて、それを、鍋かけて、そして、ボールに入れたか何に入れたか知らんけど、洗って、そして鍋に入れて、早く煮えればいと思っていっしょけんめ火たいてコトコトコト煮立って、煮えたらザルにあげて初めてそれを、お昼の、お昼だか晩だかわからなく食べてね、エンド豆ばかり一週間ぐらい続けて食ったんでないかと思うよ。(000916)

学校へ入るため貫気別の祖父母のもとへ

そのうちに学校へ入学するようになったら、「あそこの学校へは入れたくない」とこっち〔貫気別〕のじいさんがね、なかなかしっかりした人だったから、上貫気の学校には入れたくないって、迎えに来られて、7歳、早生まれだから7歳から入学しなきゃならない〔ところを〕1年遅れて、8歳から入学したの。したから、うちの孫じいさんが（私を）連れに馬で迎えに来てくれて、馬に乗せて自分は歩いて、そして連れられて貫気別へ来て。(000916)

その馬に乗ってくるとき、馬の上で居眠りして。馬から落ちてても怪我もしないで帰ってきたけどね。じいさんは乗らないで、ただ馬こう引張ってだから、馬は馬なりに自由に歩いてたんだけど、子供だから居眠りして、落ちたんだべき。そしたら〔じいさんは〕びっくりして、「大丈夫か、大丈夫か」ったけど、手も足も折れないしどこも何でもなくね。今みたいに舗装だったらきっと怪我したかも知れないけどね。昔はほんとの馬車道。馬車とか人間通るだけの一本道だったから。そういうとこ通ってね。昔はもう木原で一本道で、馬に乗ってたって、柴にひっかかるような道だったんだもの。(001028)

入学式で祖父がタナカラした

貫気別の学校へ入学するときに、こんどうちの孫じいさんが、「孫が入学するから俺が〔入学式に〕行く」って。学校へ行って、そしたら、みんなもう「やあよく来たよく来た」って言って、みんなに誉められたらなおさら喜んで、やっぱり飲むっしょ。飲んでいるうちに、今度みんなほれ、教壇に上がって、そして、何かやれっていうこと言われてるみたいなんだ。

いや困ったなあ、うちのじいさんがね、壇の上さ上がって、そして、着てるものがチカルカルでしょ、そして頭にかぶるものちゃんと被ってるでしょ、これは何かやらされるわと思ったけ、やっぱり、教壇の上に上がって、タツカヲすれって言われて、でそこで今度やっぱり、うちの孫じいさんがね、タツカヲしたわけ。

いやーもう恥ずかしいってね、そうでなくてもアイヌアイヌって言われるのに、まだこんなことしたらわし学校へも来れなくなると思ってね、恥ずかしくて隅っこさ行って隠れてたの。そうしたっけ先生方がね、何も恥ずかしいことないんだって、これがね、みんなに踊って歌って見せてやるのがね、最高なことだからお前何も恥ずかしくないからこっち来いこっち来いって連れられて来てね、そして見て、帰ってきたけど、ほんとにあんな恥ずかしいことなかった⁽³⁾。(000916)

通学のときに嫌な思いをしたこと

そして、次の日から学校でしょ、かばんもないから風呂敷に本とかそんなもの包んで学校行ったしょ、そしたら案の定、もうそこらへんにわしの姿見えたら、イコアンレキちゅうんだ、うちの孫じいさん〔の名前〕がね、そしたら今度「イコアーン」「イコアーン」って、もう渾名になっちゃって。遠くからでもわしの姿が見えたら、したら「イコアン来た、イコアン来た」ってね、「イコアーン」「イコアーン」って騒ぐの。

またそれが嫌で嫌で、学校行くのが嫌で、家へ帰ってきて、じいさんに言ったの、こうやって言われるんだって。〔じいさんは〕「いい、したら俺学校行って先生にも言うし、みんなに言って、そこらへんの人らにみんなに言うておくからいい」って。シャモの家ばかり出入りしたじいさんだから、そういう人たちに言って、そういうことだけは言わないでくれって、アイヌ軽蔑なんて、とんでもない話だってね。

それからね、あんまり、そんなひどいことなかったけど、やっぱり、この貫気別はアイヌ軽蔑で、学校行っちゃって〔このコタンから当時は〕女の子5人男2人でしょ⁽⁴⁾、その男の人たちはもう3年生も4年生もなっていて、わしらが一年生だから、だから学校行くのも一緒にない、帰りも一緒にないしょ、で、女の子だけが5人並んで行くっしょ、したら「がんべたかりー」〔「がんべ」は頭にできる湿疹(しらくも)の意〕とか「アイヌー」「アイヌー」って追ったくられて、学校行っちゃってまともにも真っ直ぐいけないうだわ。

昔はね、こっから降りてって、この山の下で船橋あったんだ⁽⁵⁾。その船橋渡って、そして今の清水鍛冶屋さんのとこさ出て、あそこからやっと橋、今の橋じゃなくてまだこっちのほうで仮橋あって、その仮橋渡って、やれやれと思って抜けたら、まともな道行けないんだもの。いじめられるから。やっとの思いで橋渡って行ったらまだ待ってるんだから。橋渡ったら、島野商店の裏に山あるんだ、あの山の下とおって、学校の入り口行ったらこんなおっきなナラあるんだ、今でもあるけど。そのナラの木まで行ってしまえば、もう、学校すぐ見えるし、門のそばまで行けば、いじめられたら、わざとにでっかい声さして〔先生に知らせるんだ〕。(000916)

学校へ行ってたころの服装など

じいさんは〔入学式に〕そのチカルカル着て行ったっけ、わしはよその子供のお下がり、うちのばあさんが、どこからかシャモの子供の着物、昔は着物だからね、みんな。それで着物買ってきたかもらってきたかして、それを着せられていったわけ。

それでも、冬は履くものないから、藁わらで作ったツマゴとか、そんなのやっぱり、わし2、3年履いたような気がする。そして、豚の皮か、牛、鹿の皮か知らんけど、なんかケリこしらえて。それを履いていくとますます言われるしょ。「豚の足だ」とか「鹿の足だ」とかってね。そんなこと言われるから、恥ずかしくてもう、下駄履いて、素足ででもいいから、下駄も自分で、まごじいさん作るから、でその下駄履いていったって、冬だもの、足が冷たくて。そして、ポッコ足袋〔靴下〕みたいな孫ばあさんが作ってくれて、それ足に入れて。そして、孫ばあさんが、豚の皮か鹿の皮で夜になると〔ケリを〕縫って、〔それを〕履いていくんだ。でもそんなもの履いていったら恥ずかしいから、途中で隠して裸足でも行くの。夏は下駄ばかり。

そして、母ちゃんも、向こうでいても生活できないし、だんだんだんだん苦しくなって、また上貫気から出てきたわけ。そして、また親と一緒に住むようになって。母親来てからは、何でもつぎはぎでもして着物作ってくれたり、ポッコ足袋でもね、裏つけて、そんなのつけて履かしてくれたり。夏はほとんどやっぱり下駄だね。(000916, 001004)

学校の先生たちのこと

そういうふうにして学校行ったけど、とにかくここ〔貫気別〕は、アイヌの子とシャモの子と半々ぐらいならね、いいんだけども、アイヌの子どもが5人か7、8人ぐらいしかいないで、あと何十人ってシャモの子でしょ。1年生から6年生までずらっと並んで、一つの教室に。したけど先生一人さ。したら、勉強だってよう教えられるもんでないしょ。やっぱり何十人もの生徒いる中でね。そして先生から先にもう、アイヌ軽蔑して、アイヌの子にはあんまり手かけない目かけないの。

そやっているうちにね、1年生〔の途中〕から今度、平取から女の先生来たんだわ。1年生の2学期ぐらいからね⁽⁶⁾。その先生来てからね、全然違うの。そして優しくされて、先生が教室行ったら、「先生、だれそれいじめたんだよー」って言ったら、先生が出てきてね、「ダメだよ、そんなことしたらね」って、そう言うからね。子どもたちもだんだん先生おっかなくなると、「ああ、こういうふうにしたらこういうふう怒られる」っていうようになって、2年生ぐらいから良くなるとこへ、今度、三好先生⁽⁷⁾っていう先生⁽⁷⁾が、年寄りの婆ちゃん連れて子ども二人連れて先生が貫気別に来たの。

この先生はまたすごく良かった。どこから来た人かわかんないけど、「先生、アイヌアイヌで言っていじめるんだよー」とか「叩かれるんだよー」とかって、もう職員室でも入っていくんだ、わしが。そしたらね、「まだそんなこと言ってんのか」って言って、その女の先生〔奥谷ハマ氏〕出てくるんだ。そして、「ほらまたあのハマコ先生来たぞハマコ先生来たぞ」って、子どもたちみんな逃げるんのさ、わしが職員室入ったのわかったら。この先生たちになってから、それでだいぶ助か

ったけど。

いじめるったってね、叩いて怪我さすとか、そういうことはないんだけどね、なしてか、「アイヌー、アイヌー」ってぼったくる〔追いまわす〕の。したから、やっぱり、逃げるしょ、そして走って、学校近くなっていじめられたら、わざとにでっかい声出して、もう、わんわん泣きながらいくのさ。そしたら、その子どもたちが来たら先生に怒られる、怒られるからまた次の日、やられる、もうそんな繰り返しだった。

その三好先生という人はね、すごい大事にしてくれてね。お昼になって、みんな帰る頃になったら、「黒川、ちょっとうち寄ってきな」って、「ばあちゃんがね、用事あるから寄って言って言ったから」ってね。そこ行ったら、ばあちゃんがちゃんとお湯沸かして待ってて、わしが行ったら頭洗ってくれてね。今考えてみれば、シャンプー。〔当時は〕そんなものも見たこともないから、孫じいさんやばあさんにね、「何だか知らんけどね、頭洗ってもらったの」って喜んで帰るんだ。

そして「うち帰って持ってって食べれよ」とかっておにぎり作ってくれて、そんな米のご飯なんか食ったことないんだもの。それはそれはもうそれこそ、金の何百万もらったより嬉しいでしょ。そして、そのおにぎり持ってきて、「先生〔の〕うちのね、ばあちゃんくれたんだよ」って言ったら、うちのばあさんたち、「いやー、ほんとにいい先生で良かった良かった」って。それがわし一人だけ。わし一人だけに、そやってすごいかわいがってくれるのさ。その三好先生っていうのがね。そして奥さんも婆ちゃんもすごい大事にしてくれるの。

先生がそやって大事にするからね、「黒川はのぼせやがって」とか「ちょっと悪いことしたらすぐ先生に訴える」とか、そんなことでもいじめられるわけさ。宿題なんか出たら、もう先生がそばに座って、そして、「これはこうなんで、これがこうだ」って、教えてくれるの。したからもうみんなにこばまれて〔意地悪されて〕さ、やっぱりね。今考えてみたら、大勢の子もいる中一人の子どもにあれだけ目かけて手かけてたらね、こばまれるの当たり前だわと思うときある。今大人になってわかるもの。

3年生の一学期まで行ったけど、一番最初佐々木先生に三好先生、ハマコ先生でしょ、この2年か3年いってるうちに今度奥田先生⁽⁸⁾でしょ、そして酒井先生⁽⁹⁾で終わり。3年生の一学期しか行かないのに、その間に5人の先生代わったんだわ。5人の先生代わったけどね、字書いて「これ読める人」って、「手挙げれ」って言われたってもう、一等先に手挙げるっしょ。3年生の一学期でしょ、そしたらもう、掛け算があるっしょ、その掛け算を、「九の段まで、明日まで〔覚えてこい〕」って言って、三の段までとか五の段九の段とか、全部わかった人、って言って、そしたら、もうわしが一番先に手挙げるっしょ。それでか何か知らんけど、すごい先生たちもね、わしば可愛がって〔くれて〕。

〔先生が家に来たことは？の問いに〕うん。家庭訪問みたいだね、やっぱり昔もあったわ。

たまにね、先生方、一年に一回くらいは来たもの。わしは来て欲しくないの、恥ずかしいから。先生来たの見たら、裏さ隠れるかしているの。だってみんなの母さん父さんはきちっとした人でしょう、うち来れば髭の伸ばしたじいさん口の染めたばあさんでしょう、したら学校行ったら恥ずか

しいしょ。そんなものでね、「もう先生、うち来ないでちょうだいね」って言って、頼むんだけど、やっぱりどうい生活してるかと思って見にきたと思うよ。

だけど、おかげさまで、先生方も大事にしてくれたし、勉強もいっしょけんめい、あれだけ側に座って、宿題なんか出したらね、そしてわしが間違って書いたところあったら、先生がこうやって、だまって書いて横に書いて置いていくから、「ああ、なるほど、こやって書けばいいんだな」と思うあれでね。(000916)

子供のころ、朝起きたあと顔洗って水汲んでこいとしつけられたこと

朝寝てたら、早く起きれば早く起きてね、代わる代わる起こされるんだよね。じいさんとばあさんにね。そして、朝起きたら、夏は、まあ今ごろ〔10月初め〕は、この沢さ行って顔洗うのも、あったかいときはいいんだけど、冬になるとわしが大儀して、「やー、どうしようかなー」と思ってもね、「早く行って顔洗ってこい」って、「顔洗ってからご飯食べて学校行かんきゃないから、学校遅れるから早く行って顔洗ってこい」って、言われるもんだから、わしも、したら沢さ行ったらもう、今ごろはいいんだけど、真冬になるとこの沢すごい、氷張るもんで、そしたらその氷を今度、このぐらいな、^{まさかり}鉞とか、こんな太いぼっこで、穴開けてでなかったら水も汲めないんだわ。

そんな時なんか、朝早いからわしが一番先に行かんきゃないしょ、そして行ったら氷張ってるから、その棒っこが、ちゃんとこれぐらいの棒っこ、子どもでも使えるような棒っこ、置いてあるもんだから、それで穴開けて、そして、顔洗うんだよね。手が真っ赤になってびりびりになって冷たくて、それでも、ちゃんと顔洗って、顔拭いてから——今考えるとね、そんなはずないのにと思うんだけど、顔洗ったら、必ず顔拭いて、そして、沢の上のほう見て、「今朝もちゃんと顔洗ったよ」って言って、沢上と下さを見て、そしてから帰って来いって、そういう羨されたもんだから。そうすると、頭もよくなるし〔と言われた〕、それもやっぱり、誉めの一つだったんでないの。子どもが嫌がることをね、やらせてるんだから、じいさんばあさんにしたら、そう言えばね、頭良くなって美人になってだから、それは必ずやれってということ言われ〔て〕、必ず毎朝、雨降ったって雪降ったって沢さ、家で顔洗えちゅうこと絶対言わないの。もう沢さ行ってこいちゅうんだから。雨降ったって雪降ったって、真冬でも。

顔洗ったら、必ず、〔沢の〕上のほうさ見て、下のほうさ見て、そしてから帰ってこいって。そうすると頭も良くなるし、美人になるし、人と話しても誰にも負けない言葉で話せるから、って言われて、「ああそうかなー」と思って、子どもながらだけど。8歳も9歳もしたら〔になったら〕、なに、孫じいさんやばあさんはわしばおだてて、そうやってやらしてるんでないかなーと思っても、やっぱりそれがもう習慣なっちゃったから、必ず、朝は沢に行行って顔洗わなきゃないもんだと思て、ずっとそやったの⁽¹⁰⁾。

わし、初めね、まるで鬼ばばか鬼じじだと思ような、やっぱり冷たくて手真っ赤になるもんだから、手冷たいからこやって〔手をこすりあわせる〕しながら〔家まで戻って〕来て、焚き火だから手あっためて、そしたら、さあご飯食って、急いでご飯食って学校行けたって、学校行きたって、

今みたいなちゃんとした着るものあるわけじゃないしね、ちょっとした、ほんとに、こんなうわっぱりみたいなもの着て、そして、ここ〔腰のあたり〕さ、紐で縛って、そしたら、学校行くとき履くように、ツマゴ、炉ぶちに、焚火だから、炉ぶちにちゃんと並べてあるんだよね。そして暖めといてくれるの。(001004)

熊送りのときの思い出など

〔家の中での祖父母の会話はアイヌ語だったか、との問いに〕そうそうそう。お客さん来てもね、みんなほれ、いろいろ、アイヌ語でばかり話す。日本語であんまり話す人いなかったね。〔セツさんに話すときは、との問いに〕うん、もう日本語でばかり。うちの孫じいさんは、「これから先は、お前たちの時代になったら、もうアイヌ語は何にも知らなくてもいい」って、覚える必要ないから、日本語だけちゃんと知っというて、勉強だけちゃんとしなきゃ、みんなほれ、アイヌの人は、字書けない読めないことによって、請求書来ても、何書いてあるかわからないしょ、そういうふうなことで、みんな騙されて、土地もとられ、いろいろなあれで、苦勞してきてるんだから、これからの人はみんないっしょけんめ勉強せいちゅうことは、厳しかったね。

で、アイヌ語はいっさいわからなくてもいい、人の話耳立てるなっても〔と言われたけれど〕、聞こえるよ、ちゃんと。側だからね。そしてみんなほれ、集まって、熊送りだ何だあって、あっちこっちの、もうそれこそ、ペナコリから荷負から本村、ずっとかけて、芽生、上貫気〔上貫気別〕の年寄りが集まるしょ、家に。〔家の大きさをたずねたところ〕うん、大きな家だった。二風谷のチセあるっしょ、あの、資料館の側で、おっきなの。あの家とおんなじ〔くらの大きさ〕。あのぐらの家だったの。ああいうふうな大きな家で、人集まったって、何にも苦にならないしょ。そういうところで暮らしたんだわ。

うちのじいさんたちの家はちゃんと床ひいてあったから、木の床ね。だから、床は高くして、すごい広々とした床ひいて、大勢集まるときは、ちょうどあの資料館で、〔その〕チセで、トマ〔ござ〕ひくっしょ、ああいうふうなことして。

そして、こんな大きな、シントコ〔行器、漆塗りの容器〕で、四斗樽よりもまだ大きいわ、そんなあれで、トブロック〔ドブロック〕作るから。熊送りするときに、焼酎とか酒ではなくして、自分の手作りで作ったドブロックでやるから。だからもう、みんな集まって、まあよく、二日でも三日でも、飲んで、で夜になるとユーカーして、夜いっばいね。

〔それは何歳くらいのことかとの質問に〕うーん、やっぱり学校行ってた頃だね、7、8歳の頃だから。みんな集まったらほれ、こやって炉ぶち叩くから、女でも男でもいる人たち、こういうふうにやらんきゃない〔木の棒で床などを叩いて拍子をとる〕もんだから、わしがほれ、手まめの、手柴でもとって、そして持って来て——焚き付けにしなきゃいけないのをうちの孫ばあさんがとってあるやつを、それ今度、このぐらいに折って持って来てここき置いてやると、もう、「えらいえらい、女の子でもよく気利く」ってね、すごく褒められて喜んで、それで、そんなもの作ってきては、みんなに手渡ししてやるの⁽⁴⁾。

したら、そんなものでなんかね、何でもかんでもこう〔拍子をとる棒に〕しないんだ、ほんとはその、神さんにお祈りするときの、あれ〔イナウ〕を作った先のところをちゃんととっついて、偉い人ほど、変なあれ〔木〕ではしないの。それはもう、ちゃんと火の神さんに立ててあるから、その根っこのところをとって、やるんだ。それをわしは知らないから、何でもいい、ぼっこであればいいと思って持って来て、いる人たちみんな〔に〕やるっしょ、そしたらそれがもうすごみんなが喜んで褒めてくれるもんだから、それが当たり前な気になって、どんどん渡してたけ、孫ばあさんが、「何でもね、エカシたちは使わない〔何でも使うというわけじゃない〕んだから、このじいさんはこういうふうなのでなきやだめ、このじいさんはこんなのもいいけど」って言われてから、あんまりそんなのは、とらないけど、作らないけども。

やっぱり、みんながこやってくれば、わしも一緒になってぼっこ持って、夜中まででも起きて、「まあ、よく寝ないで、この子だら偉いもんだ」ってね、そう言われながらわしもいっしょうけんめになって、それが何もわからないんだけど、聞いているのが〔好きで〕、すごまた、上手なのさみんな、声がいくて。それ聞くのが面白くてね、そやってた覚えもある。(001028)

魚をとった思い出

〔鮭は〕ここまで上がってくるまでにもう、二風谷〔平取の上流約6キロの集落〕ペナコリ〔二風谷から上流約4キロの集落〕あたりで、ほとんどとられちゃって、ここに上がってくるたらほっちゃれの、それこそ秋10月11月になって、もう行き場所ないような、おんた〔オス〕のもう、それこそ皮も剥けたのしか上がってこないから、本村〔荷負本村〕からこっちは、ここは行き場所〔鮭をとりに行くような川〕ないしょ。

だからここではただ、クトッって、何か籠みたいなもの拵えてそれを〔川に〕置いて、そこに間違っって迷ってきた秋味でも入れば、それはそれは大喜びで食べたことと、それに、昔はこんな蟹がいたのよね、サルガニみたいな、ザリガニもいたし、こんな蟹、真っ黒い蟹いたり、カジカいたりドジョウいたり八つ目いたり、そういうふうなことでね、うちの孫じいさんたちは魚とって、焼いて食べたりなんかしたけど、二風谷の人らみたいだね、秋味とって捕まっただの何だのって萱野さん〔萱野茂氏〕がいつも言うけど、わしらはそういう経験ないから、そういう説明もできないんだわ。

そのクトッをうちの孫じいさんが持ってって、そして川にちゃんとポッコを立てて、それで繫いでおくんだわ。そしたらそこにちゃんと魚もう、うようよ入ってるんだ。それを、じいさんが、「お前行って見て来い」っていうから、見に行ったら、わしなんか全然持つことできないのさ。重たいの、いっぱい入ってたら。

そして、見て、もうこうやって覗いてみたら魚がいっぱいうようよ入ってるし、おっきな魚も小っちゃいのもいるから、子供だから持てないから、じいさん〔のところ〕に来て、「いやー、魚いっぱい入ってて、わしこやって引っ張ることできんわ」ってね。で、じいさんが行って、そしてその籠から、今度別なものに入れて持って来て、またそれを別なとこさ置いとくの。さあそれ見に行

くの楽しみだ。やっぱりうようよ入ってるんだから、魚が。

それを、今度持ってきたら、串を作って、おっきな魚はおっきな魚で、ちゃんとその串が、こんな太いやつこしらえて、ずーっと〔ずらりと並べて〕焚火のところに焼いて、焼いてすっかり乾燥したら今度この上に火棚、火かけ、昔はすだれをひいて、そこにみんな並べて、そして、いつでも、冬でも夏でも食べれるように乾燥させておくの。焚火だから煙で〔燻されるので〕、ウジもわかないし、いつでも乾燥してるからいつでも煮干みたいに、おつゆに入れて、そうやって食べたり⁽¹²⁾。(010204)

祖父が亡くなったときのこと

孫じいさんは自分が父親代わりになってやろうとしてほんとに真剣だったからね。

八田鉦山⁽¹³⁾、今でもまだ残ってるけど、その八田鉦山の炭^{たんげん}検て、山から山へ、スクシベツ〔宿主別〕、ソーシベツ〔総主別〕⁽¹⁴⁾、あの辺ずっと歩いて、石を掘って、炭^{たん}が出る出ないかて調査した。そういうふうにしてずっと山歩いて、山さ行って一週間十日くらい、ヒエとか、食べるもの持って行って、一週間か十日いたら石ころ十ぐらい背負って帰ってくるんだわ。

そうやって山歩いているうちに、今考えてみれば、わしが13歳のときの9月に死んでるんだからね、6月ころから〔具合が悪くなって〕、4ヵ月くらいで死んだの。その前まえから〔予兆は〕あったと思うんだわ。いつもと違う、あんまり調子が良くなって。体格のいい人で、ほんとにもうそれこそ何やって夢中になって働く人だったのに。

孫じいさんが6月ごろから（具合が）悪かって、荷負の相島さん〔相島医院〕⁽¹⁵⁾に行ったら、自分たちの物置で入院してくれて言われて。そして毎日注射して、そういうふうにしてたけど、最後はだんだんもう、ものも口で食えなくなってから、萱とってきて、そしてこのぐらいにしてストロー作って、そして米をそこらへんから買ってきて、重湯みたいにして、萱のストローで飲んで。それもだんだん喉に通らんくなったから、わし、食道癌だったんでないかと思う、今になればね。わからないけど。(000916)

祖父の思い出(1) 入学前から読み書きを熱心に教えてくれた

学校行く前にも、孫じいさんが、「アイウエオ、カキクケコ…」はほとんど教えて、書いた〔書けるようになった〕し。一から百までは全部教えて、入学したから、入学したときにはもう、優等生だった。おかげさまで。

したって、ほんと厳しかったの。髭の伸ばした孫じいさんだけどね。^{すずり}硯と墨だよ、どっからか持ってきて、買って来たか貰ってきたか知らんけど、硯こうやって置いて、「墨すれ」って言われたって、そんなもの見たこともない、さわったこともないから、わからないっしょ。変にここさ置いといて、こやってやったら〔手元に置かないですろうとすると〕ずらっとして〔すべって〕、こぼれちゃうしょ。だから、ここをつかまえて、そしてこやってやらなかったら、ちゃんとした、きちっとした墨すれないしょ。変にちょこっとすって、「ああ、大丈夫か」と思って、こやって書い

たら、もう全然、あれ〔水がにじんでしまう〕でしょ。

しかたなら、じいさんが、ちゃんと墨すってから書けて言われて、それでね、自分の名前も、「クロカワセツ」って、ちゃんと、片仮名で書いて、「アイウエオ」も全部教えられて、一から百まで数えさせられて、入学したから。

だから結局、先生がたも、入学してね、こんなして、一から百まで数えるとか、アイウエオカキクケコ、片仮名で書くとか、ちゆうこと、うちの孫じいさんのとこさ来て、訊いたらしい。〔祖父は〕とにかくシャモの家にはばっかり出入りしたから、シャモの家にはばっかり小さいときから連れられて行って、みんなそこのシャモのうちにやったこと、見てたからね。だからそういうところから、硯も墨ももらってきたと思う。学校へみんな、高等科だ何だって、出していた家だから。だからそんな硯だとか墨とか、今みたいに筆とかね、〔当時は〕自由になかった〔手に入らなかった〕筈だもの。それをうちの孫じいさん持ってきてはわしに勉強教えたの。

やっぱりうちの孫じいさんね、女の子でも、これから先は、シャモと何にも変わりなくなるから、アイヌの言葉はなんも知らなくていいって、アイヌ語は全然知らないでもいいから、シャモの言葉をシャモに負けないで、いっしょけんめ勉強すれって、言われたもんだ。

だから、それで、やっぱり、あれでね、わしが二十歳^{はちたち}ぐらいなるまでも元気じいさんが生きてたら、まだまだわしの人生も変わってたし、わしのやることなすこともだいぶ変わってたような気がする。育ててくれた孫じいさんがね、ほんとに、4歳からってゆったって、3年間くらい上貫気に行って、7歳から学校に行くものを一年遅れたものだから、孫じいさんがすごく怒って、それじゃ駄目だって、わしば連れてきて、8歳から入学させて。

孫じいさんもいっしょけんめいだったけど、先生がたもいっしょけんめいだった。やっぱり、父親もいないで、母親だけで、〔家に〕来てみれば、こんな髭の伸ばしたじいさん、こんな口の染めたばあさんだからね。それが、先生がたもみじめだと思ったと思うよ。このへんで誰もそんな、孫ばあさんじいさんに育て学校行った人いないもの。二親ちゃんとそろってるから。だからわし、知らないときね、子どものとき、学校行く前とか、よその家に行けば父親がいてね、ちゃんと働きに行ったら玉砂糖買ってきたり、昔はこんな、「一円変わり玉」って飴玉買ってきたりして、自分の子どもたちにやるっしょ。わしうちへ帰ってきて、「母ちゃん」て、「なしてうちにね、おとっつあんいないのよ」って、「よそのうち行ったら、みんないてね、ちゃんと働きに行ってお金持ってきてくれたり、飴買ってくれたり玉砂糖買ってきたり。うちにはそんな人いない」って、言ったら、誰も、孫じいさんもばあさんも、だまってこうやってんだ〔うつむいてこちらを見ない様子〕。ああそれで、死んだんでない、生きててもね、きっと別れたのかも知らんて。自分で、子どもながらそんなこと考えてから、そんなこと言ったら母ちゃん可哀想だと思って、それから言わなくなったの。(001004)

〔祖父は〕家にも、〔わしが〕学校から帰ってきたら、「今日は何習ってきた？」って言われたらやっぱり、勉強してきたものを見せて、そういうふうにして、孫じいさんが、そういう厳しく、わしば勉強させて、してきたけど。(001028)

祖父の思い出(2) カムイノミなどをきちんとやっていたことなど

ほんとにその、死ぬまでの間は、わしばいっしょうけんめい勉強も教えて、シャモの家にばかり連れてけばね、見よう見真似でよそのこと見て、そして女の子だから何でもきれい好きになって、きちっと立派な子どもになれるようになって。

山から帰ってきて、[酒を]買ったってそのまま飲むわけじゃない。山から帰ってきたら必ず火の神さんにちゃんと[お祈り]して。そして、わしの守り神を作っておいて、この子は女の子だけでも、絶対、男の子なみの立派な、あれを持って、そして長生きして、この世渡りしていけるように、シャモに負けなくやっていけるようになっていう、今からはもう、アイヌのあれはもう何もなくなるから、シャモの言葉で何でも話せるようになって、そういうふうなこと言っていたから⁽¹⁶⁾。まあこうやってね、歳とって、いろいろな病気持っていたも、こやって生かされているんでないかー、と思うときもあるよ(笑み)。

火の神さんに、トッキ[杯]持って、ちゃんと、カムイノミちゃんとする。[私も]いつでもつねに、エカシのカムイノミしてることをね、側に座ってだまーって聞いているんだ。そういうふうなことが好きだったの。アイヌ語では一切しゃべらないんだよ、孫ばあさんもじいさんも、わしには。それなんだけど、アイヌ語が好きだから、黙って聞いている。さあみんな熊送りだ何するといったら、いっぱい、二風谷から芽生から上貫気から本村からいっぱい、家に集まる、何十人集まるしょ。そこでアイヌばかり集まる、アイヌ語でばかりしゃべるっしょ。ユーカラしたりウエベケレしたりホリッパしたりヤイサマしたり、さまざま、そんなのもう何年で見してきたの。そしてその、カムイノミしてるのもユカラしてるのも、みんな、見て聞いて、見て見てきたから。(000916)

祖父の思い出(3) 学校の運動会のときのことなど

運動会になんて行ったら、運動会来てくれなくていいと思うんだけども、必ず運動会に来る。そして貫気別の小学校のところで、桜の木、どこでも学校の側に桜の木あるしょ、こんな太い桜の木があったの、ずらーっと並んで。

そしたら桜の木さ、チェホロカケツ、ちゃんとイナウこしらえて、そこにこやってまつって、そしてカムイノミして、わしが走ったら一等とってきたら、もう、ちゃんーとカムイノミして。そういうふうにして、一日いっぱい、終わるまでいるの。したらそれが珍しいしょ、子どもらにしたら、見たことないから。みんな見に来るんだ。だから運動会見るんでない、そのうちの孫爺さんやることをみんなが見にくるの。わしにしたらまた恥ずかしい。「いやー、嫌だなあ、そんなことせんでもいいのに」と思うしょ。

だから、ほんとに、孫じいさんに育てられてね、アイヌの勉強はせんでもいい、シャモの勉強すれって言われたけど、今になればほんとに、いろんな先生方とでも誰とでも話してできるようになって、それもいろいろとやっぱり勉強させられてこの歳になったけど、やっぱり孫じいさんの言ったことほんとだったなあ、やっぱりときどき思うことあるわ、うん。

だから、生まれ育って、学校へ行って、学校、卒業も何もできないで、学校3年生の1学期ぐら

いで〔行かなくなつて〕、最後に習ったのが「目」と「鼻」と「口」と「手」と「足」と「耳」くらいなもんだからね、漢字で。漢字で習ったのはそれだけだもの。(001021)

祖母のこと

孫ばあさんはね、昔は、シャモの産婆さんてゆつたつて、いないもんで、うちの孫ばあさんと、その妹も産婆なの。だから、もう、あっちこっち、炭焼き、トウナイ沢だとかアブシだとか、あっちこっちに、炭焼きが入るっしょ、そしてそこで子供生まれるときには、産婆さんいないから結局迎えに来られて、夜中でもいつでも、冬は馬糞、夏は馬車で、迎えに来られていって、産婆して、そして取り上げて、まあ、一週間ぐらい、そこに泊まったり、泊まらなかつたら帰つてきたりして⁽¹⁶⁾。

だから、そういうふうにして、うちの孫ばあさんはやっぱり、産婆やる人だったからね、すごく、シャモの家に入出入りする。だから結局、うちの孫じいさんはシャモの家に入出入りする、うちの孫ばあさんはシャモの家から呼ばれる、だから結局、だんだんところ、シャモの付き合いが、うちの場合、お礼に来るのもシャモでしょ、そして、うちのじいさんもシャモの人と付き合いから、そういうなことばかり連れられて、子どもの頃、歩いて、いろいろやっぱり、勉強させられたね。今なってみれば。

で、よそへ連れられて行ったら、必ず、夜行ったら、「おぼんでした」ってちゃんと頭下げられて、挨拶すれって、言われるから、「おぼんでした」って、ちゃんと膝折って、やると、みんなもう、シャモの人たちね、「よくこれだけ仕込んだもんだ」とかって言われれば、なおうちの孫じいさん喜んで、どこにでも連れて行きたがる。だからそやってね、あっちこっち、孫じいさん〔に〕…孫ばあさんは産婆さんだから、行って、その家の赤ん坊も洗わんきゃないし、いろいろやらんきゃないから、連れられていったことはない。行ったことはないけども、やっぱり、シャモの家に、産婆で取り上げて、そして、一週間十日たつたらね、その家の人がお礼に来たり、そして（お礼の）もの持って来てくれたり、なんかしたからね、結局、シャモの家と、付き合いが多かった。

(010120)

2. 学校をやめ⁽¹⁸⁾、あちこちで働く

学校をやめ、出面に行く

妹が〔3年生のときの〕4月に生まれたから、その妹守りするために、〔自分が〕子守りしなかつたら、母親は働いてわしらは養えない。今みたいに生活保護とか児童手当なかつたしょ、昔は。何がなんだつて、働かなきゃない世の中だったからね。

そうやって、うちの妹できたもんで、今度、先生たちはほれ、もう〔私は〕3年生もなつてんだから、学校卒業するまで行かしてくれ行かしてくれって言ったけどもそれもできない。妹みなきゃなんないし、母ちゃんが働かなきゃ。弟いるし、妹に、孫ばあさんに、わしでしょ。それじゃあ、わしももう、何かして親に手助けしようと思って、そして、うちの孫じいさんが9月に死んだ年の

6月に、貫気別の中川さんというところに草取り出面に行ったの。大人といっしょに。

行ったら、子どもだからね、やっぱり、使う人だって、子どもだのに仕事できるのかと思ったんでないの、向こうの人らも。したけども、「この子はね、何でも小っちゃいときからやらされてきているから、草取りでも何でも大人と一緒にできるんだから」って、わしを連れてったおばさんたちが言って、そしてそこで、一日出面して。それがまた、孫じいさん（そのころは）元気で、まだ死なないうちのときで、わし7銭のお金もらったの。初めてのお金。出面賃。

そして、持ってきて、そして今度、「今日出面に行ったけさあ、お金もらってきたんだ」って言ってねえ、孫じいさんにやったら、もう喜んで喜んでね。こやってね、自分で働いてお金とれるような子どもになったから、自分がいなくてもこの子は絶対心配ない、自分で自分のことやっていけるってね、すごい、火の神さんにお金もってこやっていっしょけんめいかみイノミして、この子丈夫で、どこにでも何しても守ってやってくれて火の神さんに頼んで、そして、そのお金でね、お前何でもお前の好きなもの買ってこいって、そういうふうに言って。そしてその金自分でとったんだけど、一応渡したんだけどまた戻してね、「自分で好きなもの買ってこい」って。わしそれが何買ったかわからないけど。そんなこともあって。

初めてでしょう、育ててもらって、可愛がられたけども、一日出面に行ってお金持ってきて孫じいさんに渡して〔じいさんが〕喜んで。火の神さんにいっしょけんめいお礼言って。絶対この子を守ってくれて。一生守ってくれるようにって、神さん作っておいたんだから。わしの守り神。そういうふうにしたもんでね、今度、自分が死んだ後に、片付ける人いなかったら、粗末になったら困るから、自分の守ってくれた神さんと、わしに守ってくれた神さんは自分の手でささめるって。そしてやっぱり、死ぬ前にね、自分で、自分の守り神と、わしに守った神さんと、自分が今までね、こういうふうにしてきたんだから、もう絶対、自分いなくなっても、この子を一生守ってやってくれていうことを言って、ちゃんとして、そしてささめてから死んだ。(001004)

西島商店で働く

そしてさあ、今度もう、13〔歳〕から西島さん〔荷負本村の西島商店〕のときさ、冬になったら奉公に行くっしょ、ずっと。そしたら、あそこは今度、農家と店だから、今みたいにね〔今であれば〕、キャラメルでも箱に入っている、砂糖でも袋に入っている、玉砂糖でも何でもね。昔は違うの。みんな計り売り。だから、玉砂糖百目〔百匁〕くれとか、焼酎3合くれとか、全部計って。お菓子だってそう。そういうふうなことやらされたのさ、向こう行ってから。13の冬だから。エカシも死んで、孫じいさん死んでいないから、ちょっとでも働いて、親の手助けしようと思って、あそこさ頼まれて行った。そしてね、11月〔から〕、12、1、2、3、4、5、6月ぐらいになったら家さ帰ってきて農家手伝って。そんなことでね、あそこの家にやっぱり、もう、4、5年ぐらいいた。16、17〔歳のとき〕はまるっきり一年。(000916)

〔西島商店で働くようになったのは〕うちの母親と、西島のてるばあさん〔西島てる氏〕と、すごい友達だったの。ちっちゃい時からね。そしてうちの母親は、縫い物する人なの。襦袢でも、腰

巻でも、上っ張りでも、何でも縫う人、縫い物達者な人なもんだから、縫い物頼まれて、縫ったら、こんどわしが持って本村行くだわ。そして、そしたらそこから、〔西島さんの家は〕店だから、麦粉でも、砂糖でもうどんでも素麺でももらってきて、生活したから。

ずっと、そういうふうな小さい時からの、西島さんのばあさんとうちの母親と友達で、そして、〔セツさんの母は〕子供連れて出戻りで、また再婚しなかったら生活できない、うちの母さんは一人きょうだいだからね、一人っこだから、誰も助けてくれる人〔きょうだい〕いないから、西島のばあさんが店やってるから、そっからうどんでも何でも、お盆なったら行って、素麺とかそんなものかりてきて食べるっしょ、そのお金払えないから、結局縫いものでも何でもして、それを払ったり、そういうふうな、わしら子供のころからの付き合いなもんだから。それで、こんどわしがちょこちょこあそこの家さ行ったら、ああ、この子だったらね、店に置いても、家に置いても、なんも心配ないちゅうことで。(010120)

仕事しながらいろいろ勉強してきた

だから、そういうふうなね、あそこの家にもやっぱりね、勉強させられた。百目〔百匁〕とか二百目とかね、計り売りして、そんなのもやっぱり、何も書けない読めなかったら、あんなこともできなかった。計算するときには、必ず、あそこのじいさんが算盤やるの。焼酎二合、お菓子百目、砂糖一斤、とかって言ったらね、じいさんが算盤置くの。そしたら、買いに来た人もちゃんと、金を親方に渡すべさ。わしがもらうんじゃないから。そういうふうなことでもね、やっぱりあそこで勉強した。そして算盤も、したらわしだって算盤ぐらいやってみる、一銭から十銭までやればね、あとは全部一桁であれしていけばやれるわと思ってね、そして算盤も今度、練習したの。そしたら算盤もなんぼかこう、できるようになって。

だから、なんせそういうことが好きだったんだわ。もう、本読むこととか、何でも、そこらへんの落ちてるもの何でも、そこらへんの落ちた紙きれでも拾ってこうやって見たからね。もう15、6〔歳〕、もう17、8になったら手紙も書けるようになったから、そういう手紙書くのにも、もうどこにでも、昔は大東亜戦争のおかげで勉強させられた。兵隊にどんどんどんどん行くしょ、みんな、だから、兵隊さんたちに、知ってる人は全部、手紙出すの。

そして手紙出すと、〔兵隊に行っている〕そのおじさんたちは、やっぱりわしが字が下手だし、書くのも漢字あんまり書かないで平仮名ばかりだから、漢字で書いて、これにちゃんと平仮名して、返事よこすの。それがまた達筆な人ばかりでしょ、4、5人いたけど、みんなの人も達筆。それでその返事もらって。

そういうふうなことで、いろいろ勉強してきたからね。(000916)

〔西島商店で働いて〕12月31日の、もうそれこそ12時頃でなかったら家さ帰れない。その頃でね、うーんと、7銭…なんせ7つくんだけどね、7銭だったか7円か、70銭、もうわからないけど〔笑い〕、そのお金もらったとき、もう嬉しくて嬉しくてね、給料もらって、ちゃんと年間働いたやつをもらって、そして家に持って帰ってきたらもう家の親喜んでね、もう12月の31日ったらもう借金

取りがどんどん来るっしょ。そんなことで、わしの持ってきたお金で、借金取り来ても、その金で支払いできて。だからほんとに、よく親に尽くしてくれたって。こんなに真面目にね。〔自分の性格は〕口はきかない〔きかん気の意〕し、もう男まさりだしね、親も、どんな女になるかと思うくらいやっぱり、あれだったけど、仕事は真面目にやるし、することなすこときちつしなきゃ気済まない性格だったからね。

そういうふうにしてあそこにも褒められて、使われて、あその家から17で、もう2年いたから、丸二年いたから、来年は一年ぐらい家にのんびりと、農家だからね、家、だから家にのんびりとあれして、本でも、好きな本でも見たり、よその家にいれば気兼ねして本見るところじゃない、何にもできないから、一年家に居てのんびりさせてほしいと思って。さあ四方八方から、農家の家から、雇い奉公に頼む頼むって、来るんだよね、みんな。でも母親は、やっぱり小さいときからそういうふうにご苦労させて来てると思うからね、「本人がいいって言えばいいけど、本人が納得しなかったらね、無理して出せない」って言ってるの、わし部屋にいて聞こえてるんだ。(001004)

造林に出たときのこと

そういうふうに行っているうちに、今度14の春には、造林人夫頼みにきた。うちの母親は、したら造林に行って来い、っていうことで、この振内の八田鉦山の裏、ポンモタップってあるんだ、そこまで造林に行ったんだよ。

そして4月5月6月7月、7月なったらもう畑の草取りやなんか追われるから、結局わしの迎えに来る。そして来てまた農家手伝って、そして秋まで、秋あげすむまで〔秋になって農家の仕事が終わるまで〕手伝って、冬になったらまた西島さんさ行って、春なったらまた帰ってきて。また造林に行って、7月なったらまた…、まあくるくるくる、廻されて。

まあ造林に行ったら、〔自分は〕瘦せて小っちゃいべさ、そして、苗木が十本も百本も背負わんきゃなんないしょ。こんな籠のカマスに入れたやつ背負って、それ背負って、その山なんか登れるわけないしょ。はいずって歩いてたらね、やっぱり、みんなが見てて、あその、貝澤薫さん、いま町議やってる、あの貝澤薫さんの父親が班長やってたの。そしたらやっぱり、見るに見かねたみたい。そしてね、「セツ子、お前はな、明日から、飯場のご飯炊きの手伝いすれ」ちゅうの。そういうふう言われてね、「はー、よかったー」と思ったさ。

したら今度、5人、こっちから3人か4人、長知内から一人、5人女の人行ってたんだ。その中からわしが〔飯場〕でしょ、そしたらみんなにこぼまれて、なんでセツ子だけが、飯場のご飯炊きの手伝いって。飯場のご飯炊き手伝って、みんな仕事に行ってしまったあと、片付けて箒やって掃いて、そやったら今度、旦那さんて、札幌から来ていた人、いたんだ、その人が事務いろいろやって、朝起きたらご飯、お膳に入れてちゃんと持ってって、食べたら今度後片付けて、旦那さんの布団あげて、そこ掃除して、それだって大変なんだ。もう飯場の掃除と事務所の掃除と飯場のご飯炊きの手伝いとでしょ、それはそれは大変だったけども、4月から7月まで。70人から80人いるんだもの、人夫がね。それでそこでご飯炊きの手伝いして、あれだから、それだってゆるくなかった

けど、でも山さ行くよりずっと楽だったけどね。あの山はもうこりごりだった。ほんとに。(000916)

女子青年団のこと、百人一首のこと

そやってるうちに、もう、17、8になったら、女子青年〔女子青年団〕に入ったしょ。女子青年に入ったら、アイヌでわし一人だからね。あとみんなジャモでしょ、ジャモの中で一人。

そしてそれこそ、今言えば高校でしょ、高等科って荷負であって、いい家の人は高等科まで入ったような人らといっしょにやらんきゃなんないもんで、もう、読むときは何とか読むんだけど、書くときになったら、書けなかったら、誰にでも、「あらこれ何て書けばいいの？あんたどやって書いたの？わしにも教えて」って、そういうふうなね、ほんと「聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥」てね。(000916)

ここで黒川平造さんという人いてね、百人一首を、子どもたちに教えて、夜になるとランプの下でやってきたからね。もう12、3から、そういうことは、何にも映画あるわけじゃないテレビあるわけじゃないから、そういうふうなこと、あのおじさんが、わしらば教えてくれたおかげで、造林に行つて大勢の中へ入つてもばんばんとね、カルタとりもできて、それで、読むこともできて、とることもできるようになって。

して、冬になると必ずあのおじさんは、この部落の若い人たちを〔自分の家に〕集めてカルタとりするの。ランプの下だから、石油もいるのに。で詠む人詠んで取る人取って、そしてもう、そっちに50枚こっちに50枚とって〔並べて〕、ばーんと〔札を取ってその勢いで他の札が〕なげられちゃったら拾って集めてやっとならばと思つたらまたやるもんでね、もうほんとに、その百人一首やることによって、これもまた、いい勉強になったの。

わからなかったら、「この字は何ていうの？」とか「この字は何ていうの？」とかて訊いて、頭に置いといて、そしてばんばんやっつて。

わしが〔札を〕取るときに、人の札ばんなげるから、それでバラバラなっちゃうんだってみんなに怒られながらもね、もうとにかくその、向かい合つたら、絶対、一枚だって負けてならんと思うもんだから、もう突っ込んでいくべさ。だからみんなに怒られながらも、そういうふうなことで勉強させられて。(001004)

17、18のときは家にいて家を手伝う

で今度、17、8の歳に家に居たんだわ。そして農家〔家の農作業〕手伝つて。

13の時に、〔母が再婚して〕義理の親が、父親がきていたわけ。その人が馬車追い〔馬を使った運搬業〕だから、弟はもう13ぐらいになってから連れられて、二人、馬車追いで歩くんだわ。

そしたら家だつてもう、男二人馬車追ひするし、農家だったから米作つて、田んぼ作る畑つくる、そういうふうなことね、もう何ひとつ不自由なく…。

その義理の親もすっごくいい人だったからね、わしが18の時に家に居て、そやっていっしょけんめいやったもんだから、〔その頃自分は〕ちょうどこの前歯が2枚ほど、欠けてたんだわ、そした

らね、秋になったら今度、「歯入れてこい」って。「父さんお金やるから歯入れてこいよ」って。「お前がいっしょけんめ家のこと手伝ってやっても、何も買ってやることでできなかったら、その歯が2枚欠けてたらかっこ悪いから、歯入れてこい」って。平取行かんかったら歯医者もないんだよ。そしたら、平取まで行くたって、荷負まで歩いて、荷負からバス乗らなかったら行けないもんだから、荷負からバス乗って、平取の歯医者へ通って、そして、そのときに、サンブラ[サンブラチナ：貴金属の代わりに用いられた]で千円、銀歯で二千円、そういう、ここさ二本、歯入れてね。

そのときには、まだまだ、誰もそういうふうな、歯入れるとか、そういう人いないっしょ、そんなときにわしが歯入れたもんだから、もうみんな羨ましがってね。やっぱりあその家は馬車追いだからね、金取りがいいもんだから、娘にもああやって歯入れてやったりできるんだって。みんなに言われながらも、すごく働く親だったからね、夏は農家で田んぼ作って、燕麦だ大豆だ小豆だ、そんなものいっぱい作るし、売れるし、そういうふうなことで、18の時家にて、「ああこれでよかった、幸せだ、あんなに…」って、家も建てたし、掘っ立て小屋だったけどね。掘っ立て小屋でそこで建てて、そしてそこに入っているうちに、馬もだんだん増えてきたもんだから馬小屋も建てて、そういうふうになっているうち、19の年に、今度またよそへ雇いに、1年。

18の時家に居ただけで、19の時に今度また、雇いに出されて。(001004)

19になり、ふたたび雇いに出る

そしてその家に行って。また農家でしょ、そして山の造材人夫使っているから、さあもう、「金貸してくれ」「米五升くれ」「三升くれ」っていう人たちが来たら、そんなもの出してやる、金貸してくれって言う人は、わしが出すんじゃないから、だれそれが3000円貸せとか500円貸せとか言って、そこのおばさんに言えばおばさんが、出して、帳面につけて。そういうふうなことでね、まるで女中に行ったのか、何しに行ったかまたわからないような仕事ね。

全然やったこともないっしょ、そんな、山の人たちのね、米欲しい何欲しいって行ってきたらそれを出して、計って出してやったり、そして、帳面に付けたり、そういうふうなことやっぱり、誰もいなかったらわしがせんきやなんないもんだから、そういうふうなことでまたそこで一つ勉強したの。

で、まあ、その行った場所場所が、いろんなそういうふうなことで人の集まりが多いところで、西島さんは店と農家だから、いつだってお客さん切れないとこ。そして、黒川さん[このとき雇いに行った先の家]に雇いしたときには、ここの部落はほとんど黒川だからね、そこで居たときはやっぱり、山やってるから、人夫の何十人使って、さあ[仕事の]切り上げだったらそれこそご馳走作って、何十人の人集まって食って飲んででしょ、そういうふうなことで、ほんとにいろんな…。

そしたら、ここで[旅館は]遠藤旅館一軒しかないから、みんな、札幌とか小樽とか函館から来る偉い人たちが、遠藤旅館に泊まる人もいれば、黒川さんで泊まる人もいるわけ。その家に。

そこにまあ一年いて、「ああよそのあれ[奉公]はもうたくさんだ」って。これだけいろいろなことをね、勉強してきて、10月、11月も秋あげ終わったら今度、山やってるから、飯場のご飯炊き

でしょ。飯場のご飯炊きだって、今の普通の米ならいいたって、昔の外米でしょう、それをこんな〔一抱えより大きな〕釜で煮るんだから。そしてそこで、まあ15人くらいいたかな、馬車道いから山子から人夫からあったらね、それのご飯炊きして、そこで12月までつとめた。は一、もうこりごりだと思ってね、そんな飯場のご飯炊きなんかして、朝の3時から起きて、真っ暗いうちからこんなおにぎり作ってさ、そうしてもう、今の普通の米ならいいたって、こやっておにぎり作ったって外米だから、粘りがないから、「山さ行ったら割れてた」とか、文句言われるっしょ、みんなに怒られて。

人はまあ来るさいっぱい。函館だ札幌だ苫小牧だ、あちこちから。ちょうど、汽車が走るときだから、静内から富川までとか富川からどこまでとかって、その枕木を、汽車のあれ〔建設〕で枕木買う人たちがどんどん来るんだ、どこそこの社長だの課長だのって。

そんな人たちが来たら、まるきりもう、農家のあれに行っただでなく、どこかの飲み屋の女中か何かみたいで、こやって奥の部屋で、ばんばんばんばん手叩くんだわ。なんであんなことやってるのかな一と思ったら、そこの奥さんが、あれはね、酒持ってこいとか、何それ持ってこいっていう合図なんだから、お前が、銚子ほれ、五六本つけたら、お盆に入れて持ってけちゅうの。

みんな飲んだくれてるから、わしが行くの嫌でしょ。行きたくないのに、お前持ってけ持ってけちゅうんだよね。その人たちは、わざとに、わしば持ってきてもらってお酌してもらいたいがために、そういうふうにしたのさ。そして行ってもう、二三回行ったら、「やあ、ねえちゃん、お酌して」「お酌して」「お酌して」って、ああそんなものともない話だと思ってね、もう二三回行ったら、なんぼ手叩いたって呼んだって行かないの。したら「いやーいやー嫌われちゃった、ここのお姉ちゃんに嫌われちゃった」って言いながらね、そこではまるっきり、女中さんだか何さんだかわけわからないようなことで、一年暮らして。

そんなの、ばんきりばんきり〔いつもいつも／ずっと〕来て飲んで「お酌してくれ」「やーお姉ちゃん持ってきて」、こんなぼんぼんぼんぼん手叩いて、ばんきりばんきり呼ばれて、誰がそんなことするで、と思って。もうそのご飯炊きに行っこりごりだから、もう年明けてからは絶対ご飯炊きに行かないぞ、と思って、なんぼ頼まれて誰来たってわしはもう絶対行かん行かんってね、とうとう。

別な人行っても、そこで勤まらなくて、煮ればメッコ飯〔生煮えのご飯、芯のあるご飯〕だの何だのってみんな勝手なことばかり言って、そしてその人も一ヶ月ぐらいで辞めて、また別な人いったの。また別な人行っても、その人もやっぱり一ヶ月ぐらいか勤まらない、春三月中ごろか末ぐらいになったら、もう山は切り上げなるんだ、けども、その切り上げまでみんな勤まらなかったみたいらしいよ。(001004)

3. 戦争そして発疹チフスに襲われたころ

結婚の話が来るようになる

そういうふうにして、そこでもう、飯場にも行かない、ご飯炊きも行かないで、また家に居て、農家だから、農家手伝って家に居ようと思ったところが、今度まあ、家に居たら次から次と〔私を嫁に〕貰いにくれば、昔は、うちの孫ばあさんは、絶対シャモには呉れたくない、シャモは絶対だめだちゅうことでね。シャモの家から貰いにきたんだけど孫ばあさんが反対でだめ。また貰いに来たらまたシャモの家だからそれもだめ。昔はもう、そういうふうに親が反対すれば絶対行けないからね。見合い結婚でもない恋愛結婚でもない親が納得してでなきゃ結婚できない世の中だったから、わしらの時代は。

で、孫ばあさんが反対で二人もだめになって、また三人め来ても遠いからだめだ(と)、七人目でやっとこ、親が納得して、結婚したわけ。

結婚したところが、夫はすぐ出征していなくなる

結婚したところが、すぐに今度、戦争でしょ。そしたらもう、親が納得して結婚して、次の年も兵隊に行っちゃったしょ。そして兵隊に行って、〔戦後もシベリアに抑留されて〕3年も帰って来ない、そんなこんなでね、ほんとに、そのあいだに、この家だって中途半端、屋根葺いただけで、囲いしただけ。家建てる時だって釘もないから、蹄鉄屋から馬の鉄釘買って、そして、やっとの思いで囲いしただけで兵隊に行っちゃったの。

して、〔家の〕中は全然、何一つ、こんな戸一つ立てるわけでない、床ひいて、屋根かけて、このぐるわ〔壁まわり〕しただけでもう兵隊に行かれたもんだから、目の見えないばあさんと二人っきりだからどうしようもなく。よその人頼んで〔家の〕中なおしてもらったり、苦小牧とか室蘭とか開拓の人たちが引き揚げてこっち来て、その人たちの畳とか建具とか、そんなもの、親が農家やってるもんだから、米持ってって物交したり、そういうふうにしてやっとの思いで人間の入る家みたいな家に入って、いたって、だんだんもう戦争が激しくなってきたっしょ。そしたらもう、全然手紙も来ない、どこさ行ったか、旭川の部隊に入隊はしたんだけど、そこからどこ行ったかも行き先わからない。手紙も来ないし。

そういうふうにして兵隊に行って、なんも、中国かどっか満州のほう行って、満州からすぐ捕虜になって〔シベリアに〕行ったみたい。そして、兵隊に行って、どこに行ったかもわからないで、もう死んだか生きたかもわからない、それでも子どもは生まれたし、兵隊に行ってしまった後に生まれたんだから。それで女の子生まれた、したらもう、それこそ〔夫は〕どこにいるんだか生きてるか死んでるか全然わからないだって、いちおう結婚して子どもまで生まれたんだから、再婚することもできない、ここの家から出るわけにもいかない、死んだも生きたもわかるまで、と思って、手紙、何の便りもなくとも〔と〕待っているうちに、あの発疹チフス。

発疹チブスが流行る。舅ばあさんを亡くす。

〔昭和21年の〕9月から始まった発疹チブスが次々と、こんな小さい部落で十何人死んだんだよ。毎日みたく葬式。そやって舅ばあさんは11月の26日に死んだし、そして弟はそっちの部屋で〔舅〕ばあさんはあっちの部屋でわしはこっちの〔と〕3つ部屋あったから、そしてばあさんはこっちの部屋でいるうちに発疹チブスで亡くなって。そして弟は今度、〔罹ったけれども〕やっぱり若いから治ったのさ、そして、11月の末くらいに良くなって、そして、やっぱり母親も死んだし、わし一人で働いて生活しているもんだから、気の毒なっただどうか知らんけども、弟はこんど静内のほうさ働きに行ったの。

そして弟はいなくなって、舅ばあさんは死んで、そしたら子どもと二人だから、親がそこ〔近く〕だから、心配なってこんど家来てれちゅう^{うち}ことでそっちへ引っ越ししたべさ、ここの家の中のものはみんな置いて、着替えだけ持って、実家に戻ったの。

自分も発疹チブスにかかる。12月の12日に寝込み、27日まで眠り続ける。

そして12月の12日に、子どもに、靴下一足でも、どっか行ってお下がりでも、小豆でも米でも持ってけば〔と〕平取の石川写真館、あそこで子ども7、8人いたんだ、そこへ行けば、子どものお下がり物交^{がっこう}してくれるちゅうもんだから、行ったわけ。友達と二人で。歩いて。米五升と小豆三升と背負って、平取まで歩いて、石川写真館行ったの。

そしたらまたその奥さんもすごくいい人でね、「いやー、よく貫気別から歩いて来た、三里も五里もあるんだって、わしは行ったことないけど、山の中からよく出てきた」って言ってね、そしてわしらにお茶飲ませたり、おやつなんてもう、見たことも食ったこともないようなもの出されて、食べたり、そして、持ってったもの、「いやーこれ持ってきたんだけど、何でもいい、ぼろでもいい、ツギハギしてでも着せたいから」って言ったら、その自分の子どものお下がりね、毛糸のジャンパーみたいなのとか、いろいろ、いいものばかり、こんな袋に入れて、そして米五升と小豆三升やって、それ〔服が〕一荷物。

そして背負って、コウビラ〔小平〕、あそこまで歩いてきたのさ。したけ後ろから貨物〔貨物自動車〕来たのさ。手上げたら、乗せてくれたの。ところが、中にお客さんが、バスも何にもないから歩くお客さんが多いから、そこにもう3人も乗ってたら乗れないしょ、中さ。こんど上さ乗って、トラックの上さ乗って、そして本村まで来て、本村に父親、産みの父親いるもんだから、そこに寄って、あんまり寒いからお茶のいっぱいでも貰って飲んで、あったまってるべ、って言って、友達と二人でそこへ寄ったの。

そしたけ、そのばあさんとじいさん、居たさ。そして、そこへ入ったら、「お前たちどっから来た」ちゅうから「平取行ってきた」ったの。「ここでいま、発疹チブスで亡くなった人がいて、親戚いっぱいいるんだけど誰も家の中にも入れなくて、木村エイスケさんが合羽来て、マスクして、そして特長履いて、そしてタオルでマスクして、エイスケさんしか中さ入れなくて、後はだれ一も中に入れなから、ここ、部落の中通らないで、ここ川なり行け」ちゅうの。

お茶の一杯も飲むどころじゃないしょ。今度、そのまま本村のあそこから坂の下から降りて、河原さ出て、川なり〔に〕道路あったんだ、昔は。川なり今度家へ帰ってきたの。そして、家来たら、なんかもう、ざわざわするんだよね。「いやーわし風邪ひいたんでないべか」って言ったらね、母ちゃんが「もしかしたらお前風邪ひいたのかもしらんから」って言ってね、風邪薬出してきて飲ましてくれたの。

それで風邪薬飲んだんだけど、やっぱり熱だからだべさ、ふるふるふるふる震えてきたのさ。「母ちゃん、やっぱりわし、布団に入って寝るわ」って。「すごくがたがた震え出てきてるから、熱あるんだわ」って言ったら、今度体温計もってきて、熱測ってみれちゅうことで今度熱測ったの。でこうやって見たらもう40度。もう体温計びっちりなって、こうやって、ランプだからね、ランプの下でこやって見たらもう、40度ここもうびったり入ってるんだ。

「あー、こりゃわし発疹チブスにかかったわ」と思っただけで、なんーにもわからないで、12月の12日に床に入ったまんま、12月の26日に気付いたの。それまでどうやっていたんだほんとに、死んだか生きたかも何にもわからないで。食ったもんだか飲んでたもんだかよく、おしっこもどうやってたもんだからわからない。もう着たまんま。足袋はいて足袋はいたまんま。もう着たままでこやって寝ていて、気付いたわけ。(001004)

やっとの思いで起き出す。母と義理の父を亡くしたことを知らされる。

あら、わしな一、平取行って帰ってきて布団に入ったまま、見れば着たままだし、何日までこやって寝てたんだべと思ってびっくりしたのさ。ひょっと気づいて。そしたら夜も昼もうちの孫じいさんがいっしょけんめ神さんにアイヌ語で言えばカムイオロイタッって言うんだわ、そしてもういっしょけんめ神さんにしゃべってる声が毎日まいにち日にち頭から離れないんだ、それ聞こえて聞こえて。どうして、わしこやって寝てるのにな、うちの孫じいさんがわしの側から離れないでわしのこといっしょけんめお祈りしてるのかなーと思ってるうちに、はっと気づいて、見たら着たきりだから、これは一日二日でないなと思って、して今度、起き上がろうとしたら、立つことできないのさ、もうそんな、何日も寝たから。12月の12日から、27日だ。

そして、いやーどうしてこんなになってよく死なないでいたもんだなーと自分ながら思って這って、そしてうちの母ちゃんの部屋さ行ったら抜け殻。母親って、きちっとする人だったから、布団でもこやってまくってあるのに、それもそのまま。母ちゃんのものらしいもの何にも部屋さ見えないの。そしてまたやっとなら、となりの部屋さ行って、孫ばあさん寝てるそこにはちゃんとその、首から下げる、タマサイ〔首飾り〕ってあるんだ、そんなものとか、昔の年寄りはそのうふうな自分の大事なものを、首かざりとかちゃんとぶら下げてあったんだわ、ずっと、孫ばあさんがね。そしてその部屋さ行ったら、抜け殻。何にもその、首飾りもなければ、何にもないの。

いやこれもしかしたら、わしが何日寝たかわからない、12日に布団さ入ったのわかったって、今日は何日だかわからない、何日寝て、何週間、何日寝たかわからないで、孫ばあさんの部屋さ行ったら、いないわけ。やー、今度考えてみたの。子どもいたのに子どももないしょ、家に抜け

殻でしょ、[自分の] 父さんもないしょ。

いや不思議で不思議で、まずこれ何とか這ってでもいいから表さ出ればね、誰かに見つければその内容わかるわと思って、やっとこ這って、この上がりはなまでいったんだけど、杖ぼっこにするもの、ストーブだから、みんな薪あったってみんな短く切ってある所、昔みたいに焚火であればね、おそらく二尺か三尺くらいの薪になってんだけど、その頃は、もうストーブになってたから、薪ストーブだからこんな短い薪。それは杖ぼっこにもできないし、何かないかなと思ってそこらへん見ても見ても、杖ぼっこにするらしきものないのさ。ったら、すまっこのほうにちょっとしたぼっこが見えたわけ。は一、あのぼっこ何とかしてとって、と思って、今度、上がりはなからやっと後ろ、バックして、そして庭さおりて、庭さ行って這って、そのぼっこ取って、そして、壁につたわって、その杖ぼっこついて。

やっとの思いでもう、もう転んだらそのままだと思って、もう転んでも怪我しようどうしよう、とにかく道路に出なかったら誰にも見つからないと思って、そして、やっとの思いでもう、あちこち壁伝わりながら、杖ぼっこついて、道路さ出たの。

そして、子どもいたのに、4つだからね、子ども。どこにも見えないし、誰も見えないし、そして道路に立ってたら、こやって立って、まっすぐも立てないんだわ、したけどなんか人の声するなと思ってひょっと立ったら、黒川平造さんて、ここのすぐ坂上がったら右側にいたんだ、井戸もあって。そしたらそこで、いっぱい人いて、なんかやってるんだよね。「あら、あそこの婆さんか爺さん、もしかしてこの発疹チブスで亡くなってね、そして、[葬式の] 団子作るのに、こやってみんなでね、粉たたきしているのかも知らない」と思って、そこでもうだまっって、そうやってみたって目まいするから、まっすぐ立てないもんだけ杖ぼっこしたけ、やっぱりこっちの人ら、みんな見えたんだね、わしの姿。

[みんなは私の姿を見て] 最初はもう幽霊かと思ったと。もう今日か明日か、もうダメだもうダメだと言ってたから、もう今日明日死ぬと思ったけ、こっちの婆さんが先に死んだから、ああ追っかけすぐわしたわと思っていたんだとき。それが道路で立ってるもんだから、みんなもう、生きた人間でない、幽霊かと思って、傍まで来るのにみんな大変だったみたいで、やっとこ、わーとときてね、「いやーお前どうやってここまで来たの、どうやって来たの」ってもうそこからみんなわしの手つかまえて、そして家さ入ったの。

そしてまず、「とにかく寝れ」って、倒れたら終わりだから寝れ寝れって言われてね。そしてまた布団さ入って、そして重湯こしらえたりなんかして、昔はストローもないから、萱のストローこしらえて、そして重湯飲まされたの。そして飲んだりしているうちに、今度、昆布をね、煮て塩入れて、それを味噌汁代わりにして、味噌も無いから塩でしょ、で昆布煮て塩入れて、重湯とその昆布の汁を飲まされて、「は一」と思って、ああ何日ぶりでこんななったんだかと思ったさ自分でも、訳わからないから。

そやってもう何時間かたったけ、男の人二人わしの傍さ来てね、して、お前な、こやって、もう駄目だもう駄目だって、みんなほんとにお前のことを心配して、病院の先生も来れないんだけど、

夜隠れて合羽着てマスクかけて、そして来て、オオフサ先生っていたんだ、ヤマグチ先生よ、その先生が来て注射打ったんだって、わしに。札幌かどっかから、黒川利太郎さんが買って来たったか、札幌行って買って来て、ペニシリン。そして、その先生に頼んで、合羽着てマスクかけて特長はいてきて、家さそのまま上がって、そして注射したんだと。ペニシリンで尻ぺたさ打つもんだから、きれいに揉まなかったからだべさ、[痕が]いついつまでも残ってたよ。そのペニシリン打ったけ、もう日に日によくなって、お前がこうふうになって助かったんだって。だからあの薬があればね、みんなに打てば、みんな死ななくてもよかったのに、それはもう札幌まで行ってね、それこそやりむりヤミで買わなかったら買えない薬だから、それで黒川さんが行って買って来て、それでお前さ注射してこうやって生きたんだよって、助かったんだよって。だけど、孫ばあさんも死んだ、12月16日に孫ばあさんも死んで、12月の21日に母親死んで、お前の子どもはここに置いたら発疹チブスうつたら困るちゅうことで隣りの家さ預けて、隣りの家に元気にいるから心配するな、ていうこと、男の人ら二三人いてわしに教えてくれたのさ。

いやーもうびっくりして、泣く涙も出ない、ほんとに何とも言えない、どうして、なして、してなんでわし生きたんだべって言ったらね、みんな、男の人らもね、お前はそれ注射したから、もう駄目だ、今日も駄目だ明日も駄目だってゆったのがこやって生かされたのはペニシリン打ったから生きたんだけども、孫ばあさんも母親も死んで、いまじいさん一人でね、しょんぼりして、ほんとしおれて、見るにも見れないぐらいなんだけど、今おまえの傍さ来てここのじいさんは話ばできないちゅうんだ。もうすっかりしょげちゃって、ショックで、ああこれで娘[せつさん]にも死なれたらどうするべどうするべって、お前のことばかり心配して、ものもろくに食わないで寝たり起きたりしてるから、お前の傍さ来て話さできないんだから、それだけちゃんとわかっておいてくれて、そやって男の人ら二三人でわしに聞かせて。

は一そうか、それだったらわし、頑張って、子どものために強く生きなきゃなんないと思ってね、すぐ、そういうふうな心がけで、「すまないけど体温計あったら貸して」って体温計(で)計ったつけ、熱も下がってるんだわ。は一これなら大丈夫だなと思って。さあそれから今度、毎日みんな、ほれ、お粥焚いたりいろいろなもの煮たら、隣り近所の人ら持って来て、食わなきゃ早く元気になれないんだかえら、そら食えそら食えってそっちからこっちから持って来てくれるんだわ。

(001004)

ようやく治るが、さらに子供を亡くす

そしてそれ食べたり何かしているうちに、だんだん、座っててもそんなにふらふらしなないし、歩いてふらふらしなくなつて、いるうちに今度、弟が、ボロケン[幌毛志]っていうとこに働いてたのに、わしが元気になったちゅうもんで今度見にきたんだべさ。

わしの姿を見にきたらしいのに、見にきて、「姉大丈夫か」って上がりはなに、上がらないで上がりはなで言うから、「うん、どうやら助かったみたいだ」って。「したけどな、お前、母ちゃんも死んでしまったあとでどうするべ」ちったの。妹いて弟いたんだから。妹が十でしょ、そして弟が

十…六か、したからね、今度弟は一人前に山仕事でもできるからいいけど、十になる妹が、わしが育てなきゃなんないべき。どうしようかなーと思って、いたんだけど、まあしょうがない、母親もいないだし孫ばあさんもいないだし、この人は義理の父親だし、父親たって十三のときに来た、義理の父親でもすごく優しくて大事にしてくれてたね、親だから、まあ、父さん父さんて、わしが父さんて言えば弟も妹も父さんて言わせるように、わしが「父さん父さん」って言って、そしたらだんだん弟も妹も父さんて言うようになったら、やっぱり義理の父親でもすごく嬉しがってね、そしてもうわしばすごく大事にしてくれたし、[というような話を]しているうちに、弟が親子会わせてやりたいということで隣でいる子供を連れてきたわけさ。

連れてきたら親だもの、子だもの、見たら「ああお前よく元気でいた」って言うしょ。そして抱っこしてたら、[預かっていた相手の家の人が] 1回そんな発疹チブスの人に抱かれた子供がね、自分のとこさ来て、もしこの病気に罹ったらね、自分も大変だから、1回そっちさ行ったんだからもうこっちさ戻さんでくれて。子供ももう[相手の家に] 何日もいっしょにいたから、こんどそっちのあれ[嫁さん]には「あーやんあーやん」って、自分の親のようになって、夜も一緒に寝るからなついていた子が今度、戻されてきたべき。もうしょうがない。

そして二三日いたっけ、やっぱりその病気に罹っちゃってさ、そして今度、何とか先生に頼んで、まだ夜、そこバラ線張って誰も人間も通れない人も通れないくしてあるけどバラ線くぐれば人間ぐらいは通れるけど、この子、熱測ったら40度越えてるから、もしかしたら発疹チブスかもしれないから、先生に頼んで注射してほしいって頼んでさ、誰かやっぱり男の人ら行って、この子助けてくれてって言って頼んで、[先生] 来て注射したけど二日目で死んだ。それは、1月17日。

まあまあ、9月から始まった発疹チブスが、9、10、11、12、1月で[ようやく] 終わり。そういうふうにしてその、大東亜戦争と発疹チブスでしょ、大東亜戦争で、家では[夫が] 兵隊に行つて、居ない、親は死ぬ、次々と、それこそ3ヶ月も経たないうちに、11月、12月と1月で4人死んだだもの。だから二月月しないで、わしは4人に死なれたわけ。けども、子供と舅さんだけは自分の目でちゃんと葬式したけども、母親と孫ばあさんのあれ[亡くなるとき]は、全然見てない。だからそういうふうなことね、ほんとにこの発疹チブスと大東亜戦争とぶつかって、ほんとに、人に言えない、いろいろな苦労したね……。⁽¹⁹⁾ (001004)

戦中戦後の生活の苦労

だけどまだまだ、[昭和] 17、8年、大東亜戦争の時は大変だった。ほんとに子どものころから貧乏して苦労して、もう「どやって生活するか」と思うことなんぼあったからわからないわ。食べるものない、金あったって買えないしょ、戦争中だから。お金あったって何にも買えないしょ。わしらみたいなものでも、共同募金だってゆったら、それこそ、10円だ20円だって募金して、そういうふうなことね、金あったって、金なんか要らない、何にも買えない着るものも買えない食べるものも買えないから金はいらんわって、共同募金してきたら、10円でも20円でもぼんぼんと共同募金に出したぐらいだもの。何にも買えない時期だからね。(000916)

ほんとにこの大東亜戦争で、わしがいっしょけんめ勉強できたのも、この戦争。いちばん苦しんだのも大東亜戦争。そして発疹チブスになって、また食えない着れない食えないで。山さ行ってウンバイロ〔ウバユリ〕とって、おっきな袋にいっぱい背負って帰ってくれば、舅ばあさんはここで待っていて、そして、そのウンバイロを作って、食べたり、ササの実、〔同世代の人たちは〕みんな食べたことないちゅうんだ、このへんの人たちも。この山行ったら、ササが、ぶわんさと生えてんだわ。そしたら、そのササにちょうど、大麦みたいな粒、大麦みたいな大きな粒でね、そのササの実をとって、そして、持って帰って、袋いっぱいとったら、とってきて、したら、うちのしゅうとさんが、こんな大きな鍋で一回煮るんだわ。そのササの実。そして煮て、表に乾燥させて、すっかり乾燥したら、今度、臼に搗いて、そして、綺麗に皮とれたら、今度、煮るの。そしたらちょうど、大麦、大麦小麦ってあるんで、その大麦みたいなのさ。そしてそれを煮て食べたり。⁽²⁰⁾

そして、今は亜麻作ってないけど、うちにも農家やってたとき亜麻作ったけど、その亜麻の種を、ホンマさんという家あって、そこうちの舅ばあさんがお得意なんもんだから、そこ行って、その亜麻の種を、シナ縄かなんか持ってって、ただもらってくるんじゃないんだ、それも。シナ縄作って、そして持ってって、三バ〔束〕かこう、縄持ってったら、こう、クズメ〔屑米〕、クズメなんぼかと、亜麻なんぼかもらってくるんだわ。そしたらその亜麻をこう、鍋で炒って、バリバリバリ、ちょうど亜麻の種、胡麻みたいなもの、うん。で、そういうふうなやつを炒って、臼に搗いて、粉にして、こんな団子にして、お昼に食べたり晩に食べたり、まあそういうふうなことね。

でその亜麻の種に何か麦粉でも混ぜて団子するんだらいいんだけど、その亜麻をただ鍋で炒って、バリバリバリバリ、はじけるんだわ。はじけたやつを今度、冷ましといて、臼に搗いて、そして、こんな団子〔握りこぶしよりやや小さい大きさ〕作って。

わしがね、亜麻の種の団子食べたとか、ササの実食べたとかあったらね、食べたことない人多いんだわ。それなぜかったら、うちのしゅうとばあさんも、孫ばあさんも年寄りでしょ、年寄りだから、「昔はこういうふうなもの食った」とか、「ああいうふうなものこうやって作った」とかって言うしょ。「ようし、したらそんな食べれるもんだらとってくるわ」って、孫ばあさんも目見えないししゅうとばあさんも目見えないから、わしは若いし元気だから、山さ行って取ってくるっちってね、とってきたら、年寄りがちゃんとわかって作ってくれ(る)、で、茹でるものは茹でる、炒めるものは炒める、そういうふうなことね、そんなものも食べて。

だからこの、戦争ちゅうことはまったく、二度と起きて欲しくないと思うよ、ほんとに。あの戦争で、わしらぐらいの年代だったら、どこにでも、やっぱりそういうふうな、いろいろな、食べるものか着るもので不自由したと思うよ。(001021)

援農の生徒が貫気別にも来ていたこと

でその、戦争のあたりにね、茨城県とか、あっち、内地の方からね、生徒たちが、キンボウタイ〔勤報隊〕って⁽²¹⁾、大きな農家に3人5人泊まって、そして一緒に、田植えなんかするんだよね。そしたら、〔稲を〕植えたことないちゅうんだ、「ぼくね、田植えしたことあるの?」て、「あんた、

うち農家？」ったら「いや」ちゅうんだ。「いやよくやるねえ」て。したけど学校から命令されて、北海道に行って、誰それは平取町、誰それはどこ、ってちゃんと学校から割り当てられて、こういうふうにしてきてるんだってね。

「いやーほんとによくこんなにしてね、内地ってお婆さんは見たことないけどさ、行ったこともないけどあんたたちよく来てやるねえ」って言って、そしたらもう、わしがそやって話しかけるから、その3人の子どもがもうわしの側から離れないんだ、話しながらやるからね。そんな人たちもいたり、何かね、この大東亜戦争っていうのはもう、いろいろな思い出があるんだわ。(001021)

4. 戦後の暮らし

夫が帰ってくる

この戦争終わって、[昭和] 22年に[夫が] 復員して。それまでシベリアで抑留されてたら、何の連絡もないしょ。行きたも死んだも、居るも居ないも。もう、死んで、どっか[で] 死んで帰ってこれないと思ってた。あきらめていたとたんに、帰ってきてね。

さあ兵隊から帰ってきたら、やれやれ今度は男の人いるんだから何でも、そこらへん壊れたってどやったってみんな大工でも何でもしてくれるんだから、もう何も心配ないと思ったところが、兵隊に行く前は全然飲まなくて真面目で、貫気別でみんな「あんな真面目な人いない、親孝行いない」て[言われるほどの] 優秀な人だったのに、帰ってきたら、親は死んでいない、しゅうとは死んでいない、子どもは死んだ、みんな死んじゃっていないしょ、そこへ帰ってきて、ショックで最初はそやって飲むのかな[と] 思っていたら、それだけじゃなくて、なに、シベリアでいたらね、チャンチューって、今の北海道の35度[の焼酎] 以上にきつい焼酎なんだってね。兵隊に行く前の面影が何にもなくなっちゃったの。二年も三年も待ちくたびれて待つて待つて帰ってきた人がこんなに人変わってきたのか、とと思ってびっくりするぐらい。

やっぱり、すごい親孝行な人だったから、母親いないちゅうのがもう大ショックみたいだったよ。わしなんかいないでもどうでもいい親さえいればいい人だったんだもの。ほんとに親孝行な人なの。[親が] ちょっとトイレさ行って[戻って] 来るの遅かったらすぐ迎えに行ってね、一つでも咳出たら、すぐ風邪薬わざわざ買いに行って持って来て飲ませたり、ほんとにあんな親孝行な人見たことない。そのぐらい、そういう親孝行な人だったけど、そういうふうな、飲んだくれて。

それでもね、[性格が] 商人向きだから、商売が好きで、運動会とかお祭りには、水ヨーヨーだとか、そんなのが[を] 売ったり、いろいろなもの持って、オートバイで、売りに、厚^{かつ}賀までも、運動会、お祭り回りして、そういう商売が好きなんだわ。(001021)

私と夫の名前のこと

〔夫が〕兵隊に行くときに、〔夫の名は〕黒川キクジロウって付いていた〔とっていた〕のに、「〔黒川〕菊地」って言って召集令状が来たもんだから、うちの父さんが、「これ名前間違ってるから、人間違いだ」って、役場まで、平取まで自転車で、ここバスもない何もないから、自転車で平取役場まで調べに行ったら、キクジロウが菊地になってた、役場では。

それがなぜそういうふうになったかったらね、ここのじいさんは、自分の孫に、菊地っていう〔シャモの〕薬屋さんがいたもんだから、その菊地っていうシャモの名前をとって、そして自分の孫に付ければ、このシャモみたいに頭良くなるからっていうことで、そやって付けたもんだって。

わしの名前だってね、明治天皇、大正天皇かに節子妃殿下でいたんだ〔大正天皇の妻〕。そのために、その名前をとってセツて付けたの。だからわしの名前も、やっぱり昔の人はね、そういうふうな、偉い人の名前をとって付けたら、自分の孫が頭良くなるとか、いい人になれるとかっていうことで、そういう人の名前をとるもんなんだって。

それで、わしがね、もう学校へ行くようになったら、よそのおじさんたちがね、「セツ子妃殿下」ってこやって言うんだよね、それ、意味がわからないしょ、わしも。「セツコヒデンカ」って、その意味もわからないし、どうしてそういうこと言うのかなと思って、今度、やっぱり孫じいさんが誰かに聞いたんだね。「あんねー、あそこのおじさんなんかね、あそこのおばさんね、わしば「セツコヒデンカ」って言うんだよ」って。「なしてそう言うの？」って言ったらね、お前はわからないけど、昔の天皇陛下の奥さんが、節子っていうので、それでお前にセツ子っていう名前つけたもので〔と教えられた〕。だからわしの名前なんて、片仮名にもなれば平仮名にもなれば、漢字にもなって、どれが本当だからわしもわからなかったの。そして結婚して、戸籍あれしたけ、漢字でもなければ平仮名でもない、片仮名でただ「セツ」。

だからうちの父さんもやっぱり、苗字二つあるみたいでしょ、だから兵隊に行っても、どこに行っても、なんで、この黒川さんは苗字二つあるのよって言われたちゅうもの。(010204)

夫がいろいろと商売を始める。私もいろいろな仕事をする

そんなこんなしてね、いろいろな商売好きな人だったから、そういう商売して、いるうちに、わしは農家やってるから、どうしても田んぼや畑ずっと、やっぱり生まれおちからもう泥かまし土かましが好きなもんだから、それやって、〔夫婦〕二人一緒の家にいるんだけど、わしは農家でしょ、片方は商売だから、わしが秋あげ終わって、そしたら集金こんどわしがやるから、山へ働きに行ってくれてって言って、〔夫は〕マツヒサっていうとこに冬は行くの。そして、そこで働いて、まあ山頭にまでなってるね。真面目な人で働く人だから、やっぱりそういうふうなとこ行ってしまえばもう人使ってかんきゃなんないから、きちっとしたことで、秋11月に行ったら春3月までの、仕事だから。

でその間の商売して売った集金は今度わしがやらんきゃないのさ。集金しなかったら問屋さんに支払いできないっしょ。だから、わしが今度秋上げ終わったら、自転車で芽生と上貫気、本村、こ

の貫気別あたり集金して。そしてもうお金のないこは、わしも大変なんだから、こんなしてね、自転車で冬の雪道で、自転車であるくの大変だから、米でも小豆でも何でもいいからちょうだいって。そしたら、その分の金は問屋さわし払って、こっから持ってったものは豚にやって、豚あつかえばその豚売ればお金になるからって。

そういうふうなことで、父さんは山行って、わしは集金しながら、そういうふうにしてほんとにもう、次々と、いろいろなね、ことやって。で、冬になって、父さんも山行っていなかったら、わしは今度、三井生命の、保険のセールス。アルバイトで。11月から春の3月ぐらいまで、アルバイトで保険のセールスやったり、ヒツジヤの集金したり、カネモリの着物売って、着物ここに売りにきて、みんな買ってくれたら、その集金、二十何軒あるの。それやるのにだってね、昼間はやっぱり自分のことやらんきゃないから、夜今度電池つけて、冬は歩かんきゃないしょ。その住宅あるところからずっと。まあ、ほんとに、泥棒しないだけでね、いろいろなことやってきたね。

保険のセールスやって、平取までバスで行って、そしてあそこらへんの住宅、見たこともない行ったこともないところへ飛び込むんだからね、大変なものだ、ほんとに。シノエさんて、もう死んだけど、そのおばさんの世話で、うちに保険をとりに来たのさ。保険のセールスで。たら「せつちゃん、保険のセールスやらんか？あんたならきつと絶対心配ない」っていうことでね、そのおばさんに三井生命に〔紹介されて〕。

三井生命のあれ〔営業所〕は、富川でしょ、だからここから会社まで行くのにバスで行って、9時になったらみんな集まるんだから顔合わせして、今日はどこさ誰行ってどこに誰行ってちゅうこと、ちゃんと所長に話してそういうふうなこと、2、3年、やった。

だから、ほんとに、わしにはしないことは泥棒だけだ。泥棒はもう、どこにどんな自分の欲しいものあったって、それこそ、手も足もかけられない、そういうふうな性格だから、ほんとに、泥棒だけはしたことはないだけで、まったくいろいろなことやって。(001021)

夫が会社づとめをするようになる

そやっているうちに、わしもまあ、子供5人も育てていくんだから、いっしょけんめ働いてもらわなかったら、子供の教育していられないと思って、なんぼ飲んでもいいからも少ししっかりしてくれて。そんな飲み方してたんじゃね、人にも馬鹿にされるし、子どもの教育もできないからって、言ってるうちに、だんだん今度、飲みながらでも、商売が好きだから、いつでも前掛けしてるから、その前掛けにいつでも小銭は入ってるの。

そういうふうなあれは、ほんとに、商売が好きで、ザッピン〔雑品〕買って、山ほど買って、そこびっちり、もう家のぐるわ、雑品だらけだったの。そやってまとめて売れば、一万でも二万でもお金入るもんだから、そういうふうにしてね、ただ歩かないで、リヤカー引っ張って歩いて、それさビン買ったり、古本買ったり、そういうふうなことね、そういうことはほんとによく真面目にやった人だったの。だから、ほんとに、うちのぐるわに、豚小屋の二階物置ったらもう、古本山ほど積んで、古新聞山ほど積んで、それもやっぱり、雑品屋来れば、全部持ってってくれるから、お

金になる。

で、まあまあそういうふうな時代になって、なんぼか、農家して豚養って、わしは豚20頭ぐらい置いて、田んぼは一町ぐらい作って畑二町ぐらい作って、そういうふうにして、二人で、わしは農家好きだから農家、父さんは、その雑品屋とかそういうふうなの、魚とか、商売好きだからとにかくオートバイで乗って売りに歩く、帰りは雑品積んで帰ってくる。

そんなこんなして、いるうちに、今の富川で、新興電気になったけど、最初は、ニッターデンキって、あったんだよね、そこに、昭和何年だあれ、昭和40…わしが44にケガしてるんだから、父さんがそこに入ったのが、49年ぐらいに、ニッターデンキちゅうところへ入ったの。その、倉庫パンベ〔番兵：倉庫番〕でもいいからって〔夫が請われて〕、ということで、〔私は〕「父さん、行け」って。そしたらもうわしも農家もやめて豚もやめて、そしたら父さん倉庫番すれば、わしは事務所の掃除したり、会社のご飯炊きしたりして、そこで勤めれば、二人で、年とってからね、保険もらって、そやって生活できるから、そうすればいいわって。今年一二年はわしは農家やめないから、まだ農協でも、豚のえさとった肥料とったって、あるから、だから父さん、行って、向こうに勤められて。(001021)

夫が癌になる

そしたらもう、そこへ入っちゃったら冬も夏もないしよ、電気屋だから。そこで父さんは勤めて、そしてわしは農家やって、そやっているうちにね、69年〔歳〕に死んでるんだから、その前から、二三年前からちょっと具合悪そうなあれしていたんだけど、癌センターから、ここへ車来て止まって。畑から〔帰って〕きたら、〔車が〕あるんだよね。あらなんで癌センターなんて、と思ったら、この父さんが、病院で診断した結果、すい臓癌だって、って診断されてるから、札幌の癌センターに来て、すっかり検査してみなかったら、病むようになったら大変なことになるから、正月明けたらすぐ仕事一7日ったらもう会社へ行かんきゃないからね、したからその前に、向こうで癌センターにちゃんと話しとくから、そこで検査してもらったほうがいい、って言われたのさ。

そして、帰ってきて、話したんだけど、なんも、病院なんか大っきらいな人、注射するったらもう、そこらへん逃げて歩いて看護婦さんらに怒られてとつかまれて、注射するような人だったからね。

それでもう、癌だちゅうことはっきりわかったのさ。痩せて痩せて、体格のいい太った人だったのに急に痩せてね、「どっか悪いんだわ」と言って、病院あっちこっち歩いたんだけど、やっぱり、そういうふうなあれが〔その時点では癌だとは〕見つけなかったんだべさ。町立〔平取町立病院〕で、あれ〔癌〕を見つけて、町立から今度癌センターに電話入って。そんなことで、本人に聞かせると、気の小さい人一体格のいい、ほんとにもう口は頑固で、そういう人なんだけど、気の弱い人だから、話したらダメかなあと思ったんだけど、やっぱり、本人に言わなかったらあんた、病院連れてかれないうしよ。やっぱり納得させてから病院連れて行こうと思って、「父さん、ガンなんだとよ」って。「したからねえ、やっぱり、ちゃんと、その、病院でもね、見たてがね、悪いのか

も知れないから、がんセンターにすっかり検査すればはっきりわかるから、したから、がんセンターに行つてすっかり検査したほうがいいんでないか？」って言つたら、だまーってるんだよね。「そんな、ショック、あれすることないよ」って、「行って検査しないばわからないんだ」と、「病院だつて一軒や二軒じゃないんだからね、がんセンターでやればちゃんとわかるから」つたけど、それがすごいショックだったんだねえ。(001021)

私が心臓麻痺で入院する

ところが今度、わしがその、平村さんというばあさん、いたんだ、ヨネばあさんって。そのばあさんのとこさ、〔12月〕31日の晩に、ばあちゃん一人でいてかわいそうだから、遊びに行くか、つて言うから、うんしたらいつもばあちゃんそこ行つたのに今日行かないばかわいそうだから、行つて見ようかつて言つて、31日の晩に、うちに神さん祭つたりなんかしてから今度、行つたわけ。そしたら、そのばあちゃんも喜んで、「いやーよく来てくれたくれた」つて、喜んで、そこにいるうちに、〔夫が〕ばあさんに言つてるんだ。「おれなー、なんか、ガンなんだと。したから、正月明けたら今度、札幌行つて検査してこなきゃない」〔つて〕。

そしたら、ばあさんが、「ちゃんと検査して、早く病氣見付けたら、早く手術すれば治るんだから、お前がなばつて、正月明けたら行つてこえばいいんだ」つて、「7日に仕事に行くんだらその前に」つて言われたんだけどやっぱり、大ショックだったんだね。

そやつてるうちにわしは、心臓病なもんだから、そんなの聞いて帰つて、言われた本人よりわしのほうが変になつちやつたんだね、そこにいるうちに、心臓発作起きて、救急車で〔運ばれて〕、気付いてみたけ、病院でしょ。「あらーどうしたの」つて、気ついで、看護婦さんに、先生たち来たたら、「どうしたの先生？」つて。「黒川さん、全然わからないで来たべ」つて。心臓発作起きて、救急車で運ばれてきたんだぞ」つて。「えー、いやー31日の晩だ(だった)のにどうしよう」つて、だつてもう病院入つちやつたし、もうどうしようもなく、そのまま。(001021)

自分の入院中に夫が亡くなる

そして〔1月〕3日の朝なつたけ、もう5時くらいに、夜明けるか明けないかに、救急車がピーポーピーポーピーポーつて、どつか行つたんだよね。あらー、どこでまた病人できたのかな、と思つたら、うちの父さんが、心筋梗塞で、亡くなつたんだと、もう先生が来たときは。

したら先生がね、わしに、9時ころ10時ころなつてから「母さん大丈夫か？」「うん大丈夫大丈夫」つて言つたの。「今朝ね、先生、どつか救急車行つたのに、どつち行つたあの救急車？」つて言つたけ、「貫氣別だ」つて、言うんだわ。そして、そのまんま、先生黙つて帰つちやつたの。なんか様子が変わんだよね。でわしもピンときたから。

そしてまた〔その医師が〕来て、「母さん大丈夫か？」つて、「うん大丈夫だよ」つて、で「今この注射するから、少し眠つて」「あ、したらいわ」つて言つたけ、また、今度、いま函館にいる娘が来たんだけど、何にも言わないで、「母さん大丈夫？」つて。「うん大丈夫だわ」つて、して

ね、「父さんがね、具合悪くなったら、風邪ひいたら、何を飲ませたり食べさせたり、していたの？」って訊くからさ、「父さんはね、風邪ひいたら、お粥好きだから、お粥煮て、梅干と食べさせて、そしてサイダー好きだから、サイダー飲ませて、そしたら、後さ今度風邪薬飲ませれば、すぐ風邪直るんだ」って。「ああそうか、したらそうするわ」って言ってたんだけど、その態度が違うんだよね。

いやこれ、なんで、先生があんなして、「大丈夫か」「大丈夫か」って看護婦さんらは来るし、娘はそうやって言うてくるし、不思議だ、もしかしたらあの救急車がそうでないかと思ったの。

そうしていたら昼なつたけ、先生が、「いやー母さんな、僕行ったときはもう、じいちゃんだめだったんだ」って、「心筋梗塞だから、僕行ったときはもうダメだった」って、「したからね、僕ずっと、じいちゃんのあれを、体質を看てきたけど、こんなに急に逝くとは夢にも思わなかった」って。「したけども、癌センターに行けて言われたことが大ショックだったんでないかな」って言うんだ、先生も。そして、「今なくなったのは心筋梗塞で亡くなってるから」って。

まあまあびっくりしたもうほんと、「まさか先生」つたけ「いやほんとだ」って、「僕行ったときはもうダメだったんだ」って、したからな、じいちゃんが、あんな元気な人で、いっつも、〔病院に〕来れば、「このヤブ医者、ちゃんと診れ」とかって言うらしいんだ。そうしては先生にいろいろ言って、それでもその台湾から来た先生、何ったけなあ、あの先生、その先生しか好きでないの。でその先生ばかり看てたのに、まあ、心筋梗塞で、そんな急に逝くようなあれが無かったんだけど、「もう急に来たんだね」って言って。そして、1月の3日だもの、わしが31日に入院して、3日の日に死んでるの。31、1日、2日、3日、この四日間の中に、やっぱり気の小さい人だからね、2日の日に、親戚じゅうに電話入れて、「うちのばば〔せつさん〕もうダメだ」って、もう病院さ救急車で運ばれたからね、うちのばばもう死んじゃうんだって、死んでしまったら俺はとっても生きてられないから、ばばより先に死にたかったのに、こうやって、ばばがもう病院さ入ったからもう駄目だべ、って言ったたら、みんな親戚の人たちが「してお前行って見たのか」って。「いや見ないけども、もう寝たつきりで、あれしてる」て、なんも、見にも来ないんだけど自分の想像で、もう駄目だと思ったんだべさ。

そやってるうちに今度、いろいろ積み重なって、心筋梗塞で、亡くなって、そして、3日の日に、先生から、こういうわけでこうなったんだから、今この注射もするし、いろいろ処置するから、家に帰っていても大丈夫だと思うから、薬だけは切らさないで、飲んで、そして〔夫の〕葬式だけは見送りしてから〔また病院に〕来ればいいって、先生に言われてそして、わしが帰ってきたの。

いやー、病院さ自分の目で来て見れば、安心できたのに、来ないで、正月だから、来ないで家にいて。そして、娘や婿さんに、おれ31日に床屋行こうと思ったけ行かないちゃったから、お前ら髭それ髭それってね、床屋してもらったらしい。そして、3日の日に死んでるからね。

みんながいるとこで、そして他所の人らみんな遊びに来て、息子もいたから若い人たち集まって、ここで何時かまで飲んでたんだべさ。で、〔夜中の〕3時ころ起きてきて、水道ざーざー出して水飲んで、布団さ入ったちゅうのに。そして8時ころ娘が、トイレ行くのに、したらトイレが開かな

くて、もう、つけてもつけても〔戸を押しても〕、開かないでやっとな、〔開けてみたらセツさんの夫が〕、もうトイレまで来て、そのまんま。伏さったまま死んでたちゅうから、やっぱり心筋梗塞。

だから、ほんとに、恐ろしいことあるもんだなと思ったりね、何か知らんけど、ほんとにわしの、こやって生きてる間にはまったく、大ショックなことばかりがね、次々と、もう小さいときから親なくて、孫ばあさんじいさんに育てられて学校へは満足行けないで卒業もできない、卒業の、こやって同級生と一緒に写真も撮れない、先生たちとも何にもできない。してやれやれと思って結婚した途端に大東亜戦争で、ほんとに、誰にも知らないいろいろな苦勞いっぱい重ねてきて、そして発疹チブスでまた親から子供からしゅうとからみんな死んで。やれやれと思ったら、また、今度兵隊から帰ってきたら飲み放題食い放題にして、そういうふうにしたけどまあまあ食えばぐれなくどうにかやってきた。ところが今度やっとなの思いでいい会社につとめて良かったと思ったとたんに、また、9年目で死んだの。新興電気に勤めてからね。9年目で死んだけど、まあ社会保険かけてたから、「俺はもう社会保険かけてるから、俺は今度、もらうようになったら、豚扱いながら、もう仕事しないで、豚扱って（あずかって）そして豚といっしょに暮らしてる」とかってね、そういう楽しみにしてたのに、その、何も、社会保険も何ももらわないうちに、亡くなっちゃって。

ほんとに、親も子も、何となくさびしい、あれがあって、最後、69で亡くなった。(001021)

III 註記

註記では、黒川氏の語った内容に即して適宜関連資料を調査し、体験の背景や基盤の説明を試みた。なおこれは、読者への解説を意図してというよりも、先ずは、世代と生活の場を全く異にする報告者がセツさんの歩みを受け止めるための仕事として意識し、報告者なりの読解の状態を提示するためのものである。この作業は、歴史を学ぶ者として、当事者の体験に安易に依拠しない(「僕はこの人のことを知っている」ことに寄りかかって歴史を叙述しない、と言い換えてもよい) ためにも必要なことだと考えている。ただ本稿では黒川氏の語りを主とし、報告者によるより詳細な読み込みや学習の報告は、今回果たせなかった調査の補充を含め、機会を改めた。

付言すると、人々の体験の持つ意義は、ひとりひとりかけがえのないものであり、この点において等価である。従って、報告者は、黒川氏の語りが他よりすぐれた意義を有するとは主張しないし、体験のあれこれを素材に安易に類型化した議論についても慎重でありたい。

また同様に、このような聞き取りは、“まだ誰も聞かなかった真実の話”を聞き出すことに意味があるのではないとも考える。多かれ少なかれ、他者の人生やその様々な事情に触れる叙述において、書き手と読み手に読者に必要なことは「本当」を知ろうとする関心ではないだろう。もちろん、語られる様々な内容について、その言葉を大切にしつつ、なおかつその背後や基盤にあるかもしれない諸々の心性や出来事に思いを馳せること、あるいはそのような想像力ではとうてい及びもつかないことがいくらかもあることを重々承知しておくことは、必要最低限の要件であり、それらを疎かにした論評や概括は粗忽との謗りを免れない。そしてそれゆえにこそ、「本当のこと」とりわけ“それまで誰にも語られていない話”に無前提に価値をおくべきではないというのが報告者の認識である。

- (1) ここではセツさんの母方の祖父(黒川イコアンレキ)をさす。後に出てくる「孫ばあさん」も同様に母方の祖母をさす。
- (2) セツさんの母の嫁ぎ先も新冠からの移住だったとのことである(010204)。当時の上貫気別での暮らしについては、例えば川越武雄・川越キタ「平取町(上貫気別)での暮らし」『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ4 アイヌの暮らしと言葉2』北海道教育委員会、1991年3月、が具体的な体験を伝える。
- (3) この入学式のときの話は、黒川せつ「入学式のタツカサ」(『平取町二風谷アイヌ語教室広紙』第11号、1990年)にもあらましが語られている。
- (4) 1937年頃に平取尋常高等小学校が編纂した『平取村誌』(謄写印刷、北海道立図書館北方資料室所蔵)が掲載する統計によれば、セツさんが入学した頃である1934年度の貫気別尋常小学校の生徒数は156名、うちアイヌ児童は11名、1936年度はそれぞれ188名、15名となっている。なお、これはおそらく統計上の就学児童数であり、後述するせつさんのように、途中で実質的には通わなくなった生徒も含んだ数値だと推測する。
- (5) 船橋とは船を何漕か浮かべて上に板などを渡して橋にしたもの。浮き橋。
コタンの入り口にあたる貫気別川にかかっている橋については、現在のコンクリート製の橋になるまでの経緯について黒川平造「トッナレの孫」『エカシとフチ』札幌テレビ放送、1983年、参照。
- (6) 奥谷ハマ氏のことと思われる。貫気別小学校開校70周年記念協賛会編集部(編)『開校七十周年 記念誌』貫気別小学校開校七十周年記念協賛会、によれば1934(昭和9)年8月31日着任とある。以下同校の教員の確認については、同書ならびに『北海道教育関係職員録』を参照した。
- (7) 三好英二氏のことと思われる。前掲書によれば、着任年月日の記載はないが、記載箇所は上記奥谷氏の隣りであり、三好氏の次の欄は1935(昭和10)年3月末の着任となっているので、この間の時期だと推測できる。
同校でこの一年の間に次々と教員が着任したのは、この時期に生徒数が急激に増加(1930年度に100名だった生徒数は1935年度には180名となっている)し、学級編成も二学級から三学級へと変わっていったためと考えられる。
- (8) 奥田敏夫氏のことと思われる。前掲書によれば1935年8月31日着任とある。
- (9) 酒井博氏のことと思われる。前掲書によれば1937年3月31日着任とある。
- (10) このことは北海道教育委員会生涯学習部文化課(編)『平成8年度 アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査XV』北海道教育委員会、1997年(以下この報告書のシリーズについては『平成〇年度 アイヌ民俗文化財調査報告書』と略記する)32~33ページでも述べられている。
- (11) この体験については前掲『平成8年度 アイヌ民俗文化財調査報告書』36ページなどにも記述がある。
- (12) このあたりの話は『平成8年度 アイヌ民俗文化財調査報告書』26ページにも報告されている。
- (13) 1927(昭和2)年、八田満次郎が試掘権を得て探鉱、鉦床を発見し、1930年頃から本格的に事業を拡張したクローム鉦山。平取町振内にある。北海道のみならず日本国内有数のクローム鉦山として著名とされる。同鉦山については『平取町史』平取町、1974年、『北海道のクロム鉦床』地質調査所、1957年、による。

- (14) いずれも額平川上流に注ぐ支流である。
- (15) 荷負の、当時走っていた拓殖軌道〔馬車鉄道。この時期荷負を起点に上貫気別まで通じていた〕の駅前にあった。前掲『平取町史』によれば、この頃（1930年代末）の平取村内では、医師はこの相島医院を含めて3名のみだった。医院の位置などは荷負自治会郷土誌編集委員会（編）『郷土史におい』荷負自治会、1988年、『昭和9年度 日高支庁管内平取村勢一斑』平取村役場、1934年による。
- (16) こうした点は前掲『平成8年度 アイヌ民俗文化財調査報告書』にやや詳しく報告されている。
- (17) セツさんは植物のさまざまな利用について豊富な知識を持っているが、お産や産後のことに関する事柄は、このような祖母から直接伝えられ学んだことが多いようである。またアイヌ語の物語もいくつか祖母から聞き覚えている。前者についてはさしあたり前掲貝澤太一「沙流川中流域におけるイナウに使用する樹木に関する報告」を、後者は例えば『黒川セツさんのアオバトの神話』『アイヌ民族博物館だより』46号、2000年11月を参照。
- (18) 前掲『開校七十周年 記念誌』は、卒業生名簿にセツさんの名を掲載しており、同校の“公式記録”では学校を辞めることなく卒業したことになる。このことからすれば「やめる」という表現には適さない面もあるかと思う。しかしセツさんの話からうかがえる暮らしぶりからも、何よりセツさん自身の意識としても、学校は3年生の1学期頃から通えなくなったのが実際であると考え、敢えて「やめる」というセツさんの表現をそのまま見出しにも用いることとした。
- 就学率、通学率等の統計には“水増し”があるだろうことを報告者はこれまでの自著の中でしばしば述べてきたが、一般論としてそのような指摘をすることと、このような具体的な事情について解析することとは、議論の質はもちろん全く次元を異にする。
- (19) 発疹チブスの流行については「はじめに」に述べたように「発疹チブス コタンを襲う」が具体的な様子を伝えている。敗戦前後の統計はまとまったものを得にくい、報告者の得たデータをまとめると発疹チブスの患者は次のようになる。

	1943 (昭18)	1944 (昭19)	1945 (昭20)	1946 (昭21)	1947 (昭22)	1948 (昭23)
全 道	1,088/95	2,067/297	1,669/181	2,480/321	48/11	5/0
平 取				42/5	11/1	

「全道」は『第57回 北海道庁統計書』第4巻、「平取」は『平取村開村五十年史』による。数字は左が患者数、右がそのうち死亡者数。

上表からでも1946年の患者、死亡者の急増ぶりがうかがえるが、それでも、セツさんの話と対照すると平取村の死亡者らの数値は明らかに少ない。

- (20) これらのことは前掲『平成8年度 アイヌ民俗文化財調査報告書』16ページにも記述がある。
- (21) いわゆる学徒援農のことと考えられる。貫気別に派遣されたのがどこの学校なのかは未確認である。